勢田川調小留書（4）

伊勢志摩地方の蘇民符と注連縄

（一枚の護符に呪文が凝縮した独特の門符）

平成１９年６月作成

平成２４年１０月修正

大　屋　行　正

伊勢志摩地方の注連飾（伊勢市二見町）

蘇民護符の表と裏

ちまき

伊勢志摩地方の蘇民符と注連飾

（一枚の護符に呪文が凝縮した独特の門符）

まえがき

伊勢志摩地方には蘇民護符をつけた注連飾を一年中玄関先に厄除けとして飾る風習が残っている。私も子供の頃、藁を打ったり注連縄をなったり或いは護符に呪文を書いたりして、父親を兄と共に手伝った記憶がある。一年を締めくくり新しい年を迎える行事である。

護符の表には、蘇民将来子孫家門、七難即滅・七福即生、裏面には【急】（口＋急現在変換できる漢字が存在しない。以下「急」と記す）急如律令、星型のセーマン（五芒星）、格子状のドーマン（九字紋）と盛沢山の呪文を書き込む護符と注連飾はこの地方独特のものである。

今は亡き父・兄と私の三人で良き年を迎える年末の行事として毎年繰り返していたことを偲び本稿を書き進めることとする。

「蘇民信仰」は我が国各地に広く伝播し、それぞれの地で除疫の呪（うらな）いを生み出して現在にいたっている。数多い祭文・伝説の中から選んで考察・学習し学習の経過を取りまとめた。

此れは私の学習の記録であるため、必要以上の記述が盛り沢山記述しているため、冗長の感がする。

『備後国風土記』にみる蘇民将来の説話について

『備後国風土記』逸文

各種の解説書を見ると先ず紹介されるのが『備後国風土記逸文』である。本稿もその例に従って小学館の『新編日本古典全集５』「風土記」からその全文を以下に引用する。

備後（きびのみちのしり）の国風土記に曰ふ

疫隈（えのくま）の国つ社

昔、北の海に座しし武塔（むた）の神、南の海なる神の女子（おとめ）を結婚（よばひ）に座（ましま）すに日暮れぬ。その所に蘇民将来、二人ありき。兄の蘇民将来は甚貧窮（まづ）し。弟の将来は富み饒（にぎは）ひて屋

倉（いえくら）一百（もも）ありき。ここに塔の神、宿処（やどり）を借りたまふに惜しみて借さず。兄の蘇民将来は借し奉りき。即ち粟柄を以ちて座（ゐしき）とし粟飯らを以ちて饗（あ）へ奉りき。

ここに畢（をは）りて出で座（ま）しし後に、年を経て八柱の子を率（ゐ）て還り来て詔りたまはく「我、将来が為報答（むく）はむ。汝が子孫（うみのこ）其（し）が家に在りや」と問はせ給ふ。蘇民将来、答へて申さく「己（わ）が女子（むすめ）と斯（わ）が婦（つま）と侍る」と申す。即ち詔りたまはく「茅（ち）の輪を以ちて腰の上（へ）に着けしめよ」とのりたまふ。詔の随（まにま）に着けしむるに、即夜（そのよ）に蘇民の女子一人を置きて、皆悉（ことごと）殺し滅してき。即ち詔りたまはく「吾は速須佐雄（はやすさのを）の神そ。後の世に疫気（えやみ）あらば、汝、蘇民将来の子孫と云ひて、茅の輪を持ち以ちて腰に着けて在る人は免れなむ」と詔りたまひき。

以上の条文について若干注釈を以下に加える。

1．『備後国風土記』は原文がなく、『釈日本紀』に逸文として本条のみが残る。

鎌倉初期の偽作とする説もあるが、古風土記であるという説が有力で多くの「蘇民将来説話」の文献に引用されている。

2．本条は疫隅の国つ神「王子神社（素戔嗚神社）」の由緒を示したものであり、『釈日本紀』には「これ即ち祇園社の本縁なり」と記されている（異説はある）。この神社は福山市新市町の王子山に祀られている。

3．武塔の神については様々の説がある。後の項で学習を試みるが余りにも多くの神々と習合しているのでこの神の実体はよく分からない。いずれにしてもこの「説話」が広く伝承され、その地方の信仰・伝説等との習合が繰り返され伝承された結果であろうと思われる。

この段階では武塔神と素戔嗚尊とは習合されているが、牛頭天王は現れてはいない（習合は無かった）。

『逸文』の誕生と「蘇民将来説話」の普及

『続日本紀』・『釈日本紀』と「風土記」からこの説話の起源を探る。

『続日本紀』の奈良時代元明天皇、和銅６（713）年５月２日の条で「風土記」の撰進を命じた。その報告事項の一つに「古老の相伝ふる旧聞・異（あた）し事」が求められ、これに応えて各地から解文が提出された。これが「□□風土記」である。

因みに『続日本紀』は正史『日本書紀』につぐ第二の国家の正史として、第４２代文武天皇元（697）年から第５０代桓武天皇の延暦１０（791）年

までの、９代９５年間の歴史を記述した漢文の史書であり、平安時代に入って桓武天皇延暦１６（797）年に４０巻の書として完成した。
風土記は更に平安時代後期、醍醐天皇延長３（925）年にも提出が求められたとされている。
『釈日本紀』は鎌倉時代末期の文永１１（1274）～正安３（1301）年の間に卜部兼方が書いた『日本書紀』の注釈書２８巻である。上宮記・風土記など多くの古文書を参照し訓だけではなく神道的解釈で注釈をほどこしたもので、中世の学問・思想を知る上で重要とされる。散逸した古文書が引用されている点でも貴重である。
ところで、疫隈国社の社伝によると、本社の創建は飛鳥浄御原京時代の天武天皇、白鳳７（679）年である。
この『逸文』の説話から次ぎのことが読める。

１．「蘇民将来信仰」が民衆の手によって各地に広まり始たのは天武天皇白鳳７（679）年を降らない。又、この説話の時点では素戔嗚尊と武塔神とは習合されているが、牛頭天王は現れて来ない。
　続項に記したように、津島神社の社伝から素戔嗚尊と牛頭天王との習合は更に遡って欽明天皇元（540）年という説もある。
　素戔嗚尊と祇園社の牛頭天王とを習合するのは、平安時代（西暦 784～1185 年）に入ってからだともいわれている。
　これらのことから「蘇民将来信仰」は朝鮮半島からの渡来人によって、尾張国津島、備後国福山など都の周辺部に伝わり、都への伝承は西暦７～８世紀頃と推測される。
２．茅の輪は厄除けの霊力のある茅で作った携帯用の輪形の呪符。家の入り口に固定するものではなかった。
３．他の説話では素戔嗚尊は高天原で悪事を働いたことから悪事をもたらす厄病神として登場するが、この場合は寧ろ除厄神とされている。
４．続項に記述する呪文（祭文）と異なり、武塔神・素戔嗚尊の霊力を誇張することなく「蘇民将来説話」についての記述は簡明である。

参考資料　風土記　新編日本古典文学全集５　小学館
続日本紀１　新日本古典文学大系　続日本紀と古代の史書　笹山晴生　岩波書店

信濃国分寺に遺る『牛頭天王之祭文』

『牛頭天王之祭文』

前項の『逸文』の説話は「疫隈国社」の由緒を示したものであるが、「蘇

民将来信仰」の最も古い「祭文」が、室町時代中期の後土御門天皇文明１２（1480）年の書き写しではあるが、信濃国分寺に残り、今なお法会に読み上げられているという。祭文は次の通りである。

維当（これまさ）に来（きたる）年次（なみ）吉日良辰（りょうしん）を撰び定めカタジケナクモ牛頭天王、武塔天神、婆梨妻女（はりさいめ）、八王子を奉請（ぶしょう）して白（もう）して言わく、急ぎ上酒を散共（さんぐ）し再拝再拝す、
謹請（きんじょう）す、第一之（王子）ヲバ生広（しょうこう）天王ト申す、

（謹請す、第二之（王子）から第八之（王子）まで王子名以外同文のため省略。上記の諸紳を法会の座に招くための呪文か）

慎み敬いて白す、散共し奉る、抑（そもそも）昔し、武塔天神之本誓（ほんぜい）伝え請い給わルニ、是レ自（よ）リ二十万河沙（ごうがしゃ）ヲ去リテ須弥山ヨリ北にケイロ界ト云う処有り、並に白キノ御門ト申す、其御子、今之牛頭天王未だキサキノ宮定リ給ハズ、其時南天竺ヨリ山鳩ト申す羽（つばさ）一把、天王之御前ノ梅の木の枝に羽ヲヤスメサエヅル様ヲ、其時静ニ出テ聞賜ウニ釈迦羅竜宮ノ姫宮ヲハシマス、其御カタチイツクシク（して）、三十二相八十種好ヲ具足シ給ウ、是ハ牛頭天王ノキサキニ定リ給ベシトサヤヅル、其時天王キイノ思ヲ成テ、長本元年丙刀（ひのえとら）正月十三日、恋の路ニアコガレ南海の面（おも）ヲサシテ出給ウ、未申（ひつじさる）ノ時、折節ツカレニノゾミ給ウ程ニ、日モハヤ晩セキに及ぶ、ココニ大富貴ナル家有リ、主ノ名ヲバ小丹（こたん）長者ト名付ク、天王ハ立チ寄リ給テ宿ヲ借給う時、宿ハナシト答ウ、天王重テノタマハク、但（ただ）貸給エト有リシカバ、小丹大いニイカリヲ成テ父類（ぶるい）眷属ヲ以テ追出シ奉ル、天王更ニ及ば不（ず）して小松ノ中ニ陰レ給ウ、其後下女出来ル、女（なんじ）我ニ宿ヲ貸トノタマウ、下女答テ云く、我ハ是小丹長者之内ノ者也、然ニ此人ハ我ガ身ノ富貴ナルニ依テ人ノ愁ヲモ知らず、往来ノ人ヲモ憐ミ給う事モナシ、御宿ハ安キ事ニテ候エ共然間御宿ハ叶う可からず、是ヨリ東方ニ一里計行テ御宿ヲ借給えト申す、行テ御覧ズレバ、松ノ木四十二本有ル処ニ一（ひとつ）ノ木陰有リ、並（ここ）立寄御宿ヲ借リ賜ウ、其時女出テ答エテ曰く、我ハ是れ人間ノ者ト御覧ズルカ、雨風ヲ衣トシ松ノ木ヲ体トシテ過ル者也、是自（これより）東ニ万里計行テ志有ル人アリ、其ニテ御宿ヲ借給エト申しケるニ行給うニ、蘇民将来ハ立ち出テ曰く、我ハ是れ人間ノ顔（かたち）ト成テ候エドモ、貧賤無極ニシテ仍テ一夜ノ宿飯ニ成シ申スベキ物モナシ、御座ト成申ス可処モ無シト申す、牛頭天王重テノ給ハク、タダ貸シ給エ見苦シカラジ、女（ナンジ）ノ食飯ヲタビ給エト有リシ時、蘇民将来之居所ヲ取リ払テ粟ガラヲ敷キ、干筵ヲ御座トシテ請奉（うけたてまつ）

ル、粟ノ飯ノ夕飯ヲマイラセ心（むね）ヲ点（やす）メ奉ル、其ノ夜モ様様明ケレバ、御出立給テ出行給ウ時、蘇民将来白（もうし）テ言（もうさく）、公（きみ）如何成方へ行給うト申す時、天王ノタマウ、我レハ釈迦羅龍宮ノ姫宮婆梨妻女ト申す人ヲ恋奉リ、南海ノ面ヲ差テ行く者也、然ニ小丹長者ノ宿ヲ貸ザル其の恨ヲ大ニ成テ依（よって）小丹長者ヲバ罰識ニ臥テ、来世ニハ例（れい　癘？）気成リテホロボスベシト有リシカバ、蘇民将来之曰く、小丹長者ガ娵（よめ）ハ自（オノ）ガムスメニテ候、小丹長者ヲバ罰シ給ウ共我等ガムスメヲバ御除給エト申し奉レバ、其レハ安キ事也ト天王言テ、柳ノ札ヲ作テ蘇民将来之子孫也ト書テ、男ハ左、女ハ右ニ懸ル可シ、其レヲシルシニユルスベシトテ、小丹長者ヲバ罰識ニ臥せ、牛頭天王ハ南海ヲ差テ出給ウ、其の後、釈迦羅竜宮ノ姫宮ニ相（あい）奉りテ十二年之内ニ王子八人マウケ給テ帰国シ給ウ、其ノ部類眷属九万八千有リ、小丹長者ハ此事ヲ請給テ、魔王ノ通ルトテ四方ニ鉄ノツイジヲツキ、天ニ鉄ノ網ヲ張リ、屋堅ヲ（して）居給ウ、又蘇民将来ハ請給テ、金ノ宮殿ヲ造テ待チ奉ル、牛頭天王御覧（じて）如何ナル事ト問給ウ、蘇民将来答テ曰ク、公ノ御通リ賜ウ後、天自（よ）リ宝降リ、地従（より）泉ワキ出テ、七珍万宝充満（みちみち）タリ、然ニ君ヲ三日留奉ランガ為也ト申ス、然間三日留給テ、小丹長者ガ処へ使ヲ立テ見セ給ウニ、四方天地ヲ閉テ入ル可キ様モ無シト申ス、其時天地ニ開（さ）ク花ヲ入テカガセ給ウ程ニ、善知識ノ水ノ流ルル有リ、９万八千之眷属ヲ以テ、七日七夜之内ニホロボシ給ウ、其後、小丹ガ子孫ト云（いわん）者ヲバ一人モ立ツ可カラズト言（ノタマ）ウ、又其時従（より）、蘇民将来ノ子孫ヲバユルシ給ウ、当病平癒、心身安穏、息災延命、福寿増長、七難即滅、七福即生、家内富貴、子孫繁盛、殊ニハ邪気、怨霊、呪詛ヲバ万里之外ニ払ヒ、牛頭天王、婆梨采女、武塔天神、八王子、蛇毒気神王等之部類眷属、愛愍（あいみん）を垂れ納授ヲし給へト、敬いて白す、再拝々々す、上酒を散供す、

謹請す、首（かしら）五体の病ハ武塔天神ニ申し給ウ可シ、
謹請す、口ノ病ハ婆梨細女ニ申し給ウ可シ、
謹請す、足ノ病ハ大良ノ王子ニ申し給ウ可シ、
謹請す、腹ノ病ハ次良ノ王子ニ申し給ウ可シ、
謹請す、喉ノ病ハ三良ノ王子ニ申し給ウ可シ、
謹請す、胸ノ病ハ四良ノ王子ニ申し給ウ可シ、
謹請す、手ノ病ハ五良ノ王子ニ申し給ウ可シ、
謹請す、腰ノ病ハ六良ノ王子ニ申し給ウ可シ、
謹請す、モモノ病ハ七良ノ王子ニ申し給ウ可シ、
謹請す、膝ノ病ハ八良ノ王子ニ申し給ウ可シ、
南斗北斗、讃歎玉女、左青竜、右白虎、前朱雀、後玄武
急急如律令

文明十二庚子（1480）年　霜月廿八日　書写し畢（おわん）ぬ

『祭文』についての考察

この祭文の構成は

１．法会の開催にあたり、牛頭天王、武塔神、婆梨妻女、八王子を神酒を供え丁重に法会の席に迎える呪文。注意すべきことは、「其御子、今之牛頭天王未だキサキノ宮定リ給ハズ」というくだりがあり、牛頭天王と武塔神は同一神ではなく、牛頭天王は武塔神の御子であるとされている。

２．武塔神の誓願の語りという形で、「蘇民将来説話」で牛頭天王の疫病神としての威力を称え、崇敬することによって厄除けを祈願する。この祭文には素盞嗚尊の名は出てこない。神道とは習合していない。

３．丁重に礼拝し酒を献じて、武塔神、婆梨妻女、八王子に病平癒の祈願をする。

であり、厄除けの呪いである。

この祭文が何時頃から始まったかはよく分からないが、国分寺の創建が聖武天皇天平１３（741）年の詔によって始まったといわれており、信濃国分寺は比較的早い時期に完成したとされることから、奈良時代中期と思われそれ以前には遡れない。仏教の力は強まっているもののまだ神仏習合はさほど浸透していなかったためか、或いは仏教単独の祭文であるためか、我が国古来の神道即ち素盞嗚尊との習合はなかった。

然し、この祭文は既に陰陽道の影響を受け、蛇毒気神王の神が現れる。此れは陰陽道『三国相伝陰陽管轄簠簋（ほき）内伝』（鎌倉時代末期、西暦１４世紀初期に成立）では八王子の八番目の王子、三頭天王のことを指しているという。

西暦７世紀終末から８世紀初頭に築かれたといわれる高松塚・キトラ古墳の壁面に描かれた青竜・白虎・朱雀・玄武は古代大陸で信仰された東西南北を象徴する神獣で四方の守護神である。これも陰陽五行説に基づくものである。

祭文の最後に書かれている「急急如律令」は『簠簋内伝』に、「爰に天王曰、我昔此国ニ到ル時、此松園中ニ一賤女有リ。巨旦奴ノ婢女ト雖モ、我ガ為ニハ恩徳人、彼女助ント欲ス。梅木札ヲ削リ「急急如律令ノ（呪）文」ヲ書キ写シ、指ヲモッテ彼牒ヲ弾カシメレバ、賤女ノ袂中ニ収マリ、然シテ此禍災ヲ退ク」とあり陰陽道の厄除けの呪文である。

又、「蘇民将来之子孫也」と書いた柳の札を男は左、女は右にかける。という厄除けの呪いもあった。

更にこの祭文は道教の影響も受けている。即ち南斗星君、北斗星君、玉

竹女など道教の神々の名が羅列されている。祭文の最後に書かれている「急急如律令」は道教の呪文でもある。陰陽道と道教は習合・合体されている。

この祭文は我が国古来の神道を除く当時の外来信仰の全てを習合し、より強力な除厄神として高め、恐るべき厄病神の退散を祈願したことを示している。未熟な医学のもとでは、ただひたすらに神に祈り呪（まじな）いに頼るしかなかった。

このような習合がどのような経過を辿ったかについては別項で学習するが、次ぎに今一つ伊勢地区に残る縁起・祭文を述べる。

参考資料　上田市マルチメデア情報センタホームページ　蘇民将来符　その信仰と伝承
祇園信仰　七つのキーワード　五島健児　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版

神宮文庫蔵の『牛頭天王縁起』と『八王子祭文』

『牛頭天王縁起』

抑牛頭天王ノ根源ヲ尋奉レハ、須弥半腹豊饒国ト云国有、其国ノ主ヲハ武塔天王ト申。太子一人御座、御名ヲハ武答太子ト申奉。七歳御時マテハ童子形チニテ御座。然ルニ八歳御時ニ、其ノ御背五尺ニ現シテ、御面三面顕タマヒ、又額ニハ十一面現タマフ、御頂三尺ノ牛角生ヒ出タマフ、赤色ノ角生出タマフ間、父大王、是ハ不思議ノ太子、化生王子タリトテ、御位ヲ辞シテ、彼太子ヲ御位ニ付奉。牛角生出タマフ故ニ、牛頭天王申奉、又金剛自在天ト申、或ハ武答天王神ト申。仍盤古大王ノ為メニハ彦、黄帝竜王ノ為メニハ孫ニテ御座。故御母ヲハ倉女ト申、父東王父天ト申奉也。故大将軍ニハ兄ニテ御座ス也。其形像ヲ尋奉ルニ、頂ニハ五ノ牛角ヲ戴タマフ。是即妙法蓮華経ノ五文字也、亦（梵字五文字）五字也。面三御座、是亦法報応三身、空仮中ノ三諦、仏金蓮ノ三部・三点ノ表示也。手ノ十二御座ス、是レ又タ薬師十二神将、又ハ十二宮神形像也、是レ即チ本跡不二、加持無二ノ躰也。然ルニ彼ノ牛頭天王ノ后キハ、南海沙竭羅竜王其姫宮佐伽・女ト申シ、又波梨采女トモ申、彼ノ姫宮ヲ后トシテ、八王子ヲ儲ケタマフ。彼八人王子申、第一ニハ相広天王、第二ニハ魔王天王、第三ニハ倶魔羅天王、第四ニハ良時天王、第五ニハ徳達神天王、第六ニハ達尼漢天王、第七ニハ持神相天王、第八ニハ宅相神天王也。此ノ天王ニ八万四千六百五十四神ノ眷属ノ中ニ、悪鬼・悪神御座。其本地ヲ尋奉ルニ、東方浄瑠璃世界ノ薬師如来ニテ御座ス也。故ニ八王子ハ八菩薩也。然ルニ彼ノ薬師如来、忉利天ノ衆生ヲ利益センカ為メニ、忉利天ニ住ミタマフコト一千八百歳也。其後天地開闢シテ、住劫初メ、人間界ニ人住シ始シ時、忉利天ヨリ天ニ下

リ、北天竺九蔵国吉祥ノ苑ニ住、其間一億九万九千四百四十二年也。又唐土ニテハ神農皇帝ト顕レテ、国ヲ収メタマフ事四百三十六年也。其後二千八百十八年過テ、秦ノ始皇ノ御代、彼ノ神農帝ヲ初テ神崇メ奉ル。牛頭天王申初（ソメ）タリ、其故ハ神農皇帝モ牛頭・馬面人身、鳥手足ニテ御座ス、故ニ首（カシラ）ヲ取テ、牛頭天王ト申奉也。其後我朝日本国へ来タマフ事、人皇第七代孝霊天王ノ御宇四十四年乙卯、初我朝対馬国来住シタマフ。其後七百八十五年過テ後、欽明天王御宇元年巳未年（越年称元法では翌年の庚甲年西暦 540 年となる。　私の注記）、彼対馬国又東海道尾張国海マ部（へ）ノ郡真庄津島津ニ来リ、東国の衆生利益シタマフ也。其誓願者、巨旦カ末孫ヲハ治罰スヘシ、蘇民カ子孫ヲハ守護ス可ト云本誓既ニ新ナリ。就中病者某、此家慥（タシカ）ニ蘇民将来ノ遺跡ナリ、家内諸人悉蘇民子孫タリ。仍本誓ト云フ、祟ヲ成シ契約ヲ失乱入ヲ致病悩ヲ与へ給也。然ハ者、本誓悲願ニ任テ、牛頭天王・八大王子・八万四千六百五十四神眷属等、忿怒ノ祟ヲ止テ、一々ニ本処ニ還テ、慈悲心ニ住、各各ノ本宮ニ住シテ、信心施主守護神ト成テ、当病平愈、寿命長遠、家内諸人悉ク当病平安守護セシメタマヘト除送申処。南無大慈大悲牛頭天王・八大王子・諸大眷属等敬白。　梵字五字

参考資料　祇園牛頭天王の成立　西田長男　祇園信仰事典(真弓常忠編)　戎光祥出版

『牛頭天王縁起』の考察

この『縁起（実際は祭文）』は次項に紹介する『八王子祭文』と共に、豊受大神宮の鎮座する山田地方で実際に読誦されていた祭文として神宮文庫に収蔵されている。本書は天明４（1784）年、京都の書肆勤恩堂村井古厳の奉納に関るもので、書写の年代は江戸時代中期頃（西暦 1700 年代？）とみられる。

この『縁起』とは別に更にもう一通、神宮文庫に所蔵される『牛頭天王之祭文』がある。これは宝暦８（1758）年に（外宮？）権禰宜正晃（御塩物忌神主）が書写したものがある。

伊勢志摩地方の蘇民伝承の詳細は後項で学習するので、歴史的な背景についてはこの項では省くが、この『縁起』に登場する牛頭天王について少し整理しておく。

牛頭天王（金剛自在天・武答天王神）については、次の様に述べられている。

父は須弥半腹豊饒国国主武塔天王（仏教　薬師如来）、東王父（道教　仙人）、盤古大王（道教　中国神話の原始的巨人、その死体は宇宙の万物に化成した）の彦・黄帝竜王（道教　中国古代の伝説上の帝王）の孫・大将軍の兄（陰陽道）、神農皇帝（道教、仏教、陰陽道）。母は倉女とあり、その出自は宗教により多様である。

牛頭天王は我が国の対馬国に来住、更に欽明天皇元（540）年に尾張津島に来り、東国の衆生利益し給うとある。津島神社の社伝でも欽明天皇元（540）年に素盞嗚尊が鎮座（相殿大国主命）したとあり、この時点で牛頭天王と素盞嗚尊と習合されたことを意味する。

除厄神である武塔天王・牛頭天王は蘇民説話の伝播につれて、その地における他宗教の神々と習合され、その霊力を高めていったことを示している。伊勢地区で読誦されていた『祭文』も仏教、道教、陰陽道そして我が国古来の神道とも習合されたものであった。

『祭文』中に「就中病者某、此家慥（タシカ）ニ蘇民将来ノ遺跡ナリ、家内諸人悉蘇民子孫タリ」と述べていることから、この『祭文』は特定の寺社の社頭で読誦されたものではなく、信心施主の依頼がある毎にその家に勧請した二天・八王子等の前で読誦されたのではないか。所々に梵字のあることから、読誦していたのは真言系の僧侶ではなかったか。京都の祇園社でなく津島神社であるのは、津島牛頭天王社の影響下にあった東国の法師陰陽師たちの述作ではないかといわている。

参考資料　祇園牛頭天王の成立　西田長男　祇園信仰事典(真弓常忠編)　戎光祥出版

『八王子祭文』

謹請東王父天并西王母天、此二柱御中出生給、
謹請牛頭天王并薩迦陁女神御座ニ来リ就ク。
　　其二柱御中ヨリ出生給八王子也。
謹請第一王子相光天王。謹請第二王子魔王天王。謹請第三王子倶魔羅天王。謹請第四王子徳達神天王。謹請第五王子羅侍天王。謹請第六王子達尼漢天王。謹請第七王子侍神折（ママ）天王。謹請第八王子宅神摂天王。来リ集ヒ座ニ就ク。謹請天一神王変化・蛇毒神王・蘇民将来・及諸眷属八万四千六百五十神等、各方面来入座ニ就。謹請当所大小諸神等、皆来集座就。再拝。今日大施主等氏人・村人息災、延命、家門繁盛、恵保給。減（ママ）以後高位哀愍、福楽・五穀成就、六畜万倍、神徳広大、穏安楽快、急急如律令。再拝云云。
昔武答天王、此界域ヲ出給。南海沙竭羅竜王女子ノ波梨女ヲ王后思、彼宮御座時、道間ニシテ日暮レ、富貴長者家ニテ、其名ヲハ巨達（ママ）申其家ニ宿ヲ借（ト）リ給ニ、其家子ニ波倶ト云シ人出来、事由ヲ承、父巨達（ママ）将来出来テ申サク、何人来給ソ、御形ヲ見奉ルニ例人ニアラスト云テ宿奉ラス。四面ノ之戸ヲ閇入ヌ、其時神王恨ヲ成給テ返給間、一山ヲ越テ山ノ下（フモト）ニ草庵アリ、蘇民将来カ家ト申ニ、其家ニ宿給ニ、蘇民将来申テ云ク、己家甚タ貧ニシテ客人宿奉ヘキ処候ハス、何以テカ御餐ニ奉

ント申、神王宣、我遠来テ疲タリ、猶宿ヘシト宣、是レニ依テ蘇民将来家ニ返、粟（アハ）ノ柄ヲ取テ門之松ノ下敷宿シ奉。明日早朝ニ出給フニ、蘇民将来申テ云サク、是レヨリ南ニ嶋アリ、南海沙竭羅竜宮ト申ス、彼嶋カサシノ礒浦ニ女神座、御名ヲハ波梨女ト申ス、其御処御座セシメ給ヘ、其時ニ神王竜宮ニ着給ニ、竜宮照カガヤク、竜王驚出向テ事由承、女子計奉事既終。八個年ヲ住給間、八柱王子達生給フ、其御眷属八万四千六百五十四神也、其中大悪神御座、・毒気神王、此眷属ヲ引率シテ返給、先宿借（カ）シ奉蘇民将来恩徳報ント宣テ、蘇民将来カ子孫トイハン限、世々万代至ルト云トモ守護ヲ加、哀（ママ）礼成宣ヒ、各誓願ヲ立宣。

第一王子。名ハ相光天。誓願云。若人千万人勝思ニ、我名百遍称セバ、必勝シメン。

第二王子。御名は魔王天。誓願云。若田畠作ル所、諸々之悪虫食損ニ我名ヲ百遍称、必五穀ヲ成就セシメン。

第三王子。御名ハ倶魔羅天。誓願云。若人ノ家諸恠有時ニ、我名ヲ百遍誦ハ、必守護セシメン。

第四王子。御名ハ徳達神天。誓願云。若女ノ血アヘサラン時、我名百遍誦、必アラシメン。

第五王子。御名ハ羅侍天。誓願云。若家ニ鳥獣恠アラン時、我名百遍誦、形随守護セシメン。

第六王子。御名ハ達尼加（ママ）天。誓願云。若人家畜生・奴婢恠有時、我名百遍誦、必消滅セン。

第七王子。御名ハ侍神相天。誓願云。若人家内五躰悩物有時、我名百遍誦、必除愈セシメン。

第八王子。御名ハ宅神摂天。誓願云。家内腹・胸病物有時、我名百遍誦、必除愈セシメン。

爾時武答天神王并所生八王子誓子此如シ、蘇民将来申云、末代衆生何而蘇民将来ノ子孫与（ト）知ラシメルカト申奉。神王宣、茅輪（チノハ）ヲ作テ右腰ニ着（ツケ）シメヨ、註（シルシ）タ守護（ママ）セシメント宣フ、仍今日蘇民将来子孫ト称、御幣捧、供物厳掛、恐敷（ヲソロシク）御座東王父天・西王母天・及所生八王子・眷属諸神、証知納受令（セシメ）給。

維当（コレマサニ）来大歳、某年某月某日付入句スヘキ也、王女・天王ノ御門ヲ開王城ヨリ、巽（辰巳　南東ノ方向　私の注記）東海道勢州度会郡山田原而其郷其村而居住令（セシ　私の解釈）給諸氏人・上中下兆民、二天・八王子仕令（セシ）奉給。然則（シカラハスナハチ）献セ所（ラル　私の解釈）種々供物、三輪清浄也。照給随喜悦頂ノ上ニハ、上中下氏人各息災、延命、恵持令（シメ）給上（ママ）、徳上ニ弥（イヨイヨ　私の解釈）神徳重。高官・福徳日増、師旦和合而（シテ　私の解釈）檀那繁盛、一々安全、諸願満足、疑ヒ無シ。仍再拝云云。

退申。財施・法施種々壇厳、然則此功徳酬。二天・八王子証知・昭見納受

令（セシム　私の解釈）、上ハ長官始、上中下氏人・兆民到。寿命長遠、福徳自在、意ノ如ク満足。敬白再拝云云。

参考資料　祇園牛頭天王の成立　西田長男　祇園信仰事典(真弓常忠編)　戎光祥出版

『八王子祭文』の考察

この祭文も前稿の『縁起』と対になって伊勢山田地区で読誦されていたもので、外宮の神職が関っていたことは注目に価する。

この祭文の構成は

1．法会の開催にあたり、牛頭天王、薩迦陁女神、八王子・蛇毒気神王・蘇民将来・諸眷属・当所大小諸神を法会の席に迎える呪文。注意すべきことは、牛頭天王の父は東王父天、母は西王母天（道教）としていること、及び蛇毒気神王（陰陽道の禍をばら撒く神）を迎えていることである。

2．誓願の前文を陰陽道（道教）の「急急如律令」という呪文で締めている。

3．八王子に対する具体的な誓願に先立ち、蘇民将来説話が述べられ武答天王が蘇民将来子孫に限り、万代に至るまで加護あることを誦なえ、八王子に対する除厄の誓願を誦える。

　魔除けの呪いは「茅の輪」を作って右腰に付ける。蘇民将来の子孫として御幣を捧げ、供物を献じて祈願をする。「茅の輪」の風習は現在当地には残っていないが、玄関を飾る注連飾がその名残といえようか。

4．外宮の鎮座地伊勢山田原に住む一禰宜（長官）を含め神官・庶民が供物を献じて、信仰していたこと、師旦和合而（して）檀那繁盛とあり御師の影響も大きかったといえよう。

神道のメッカである当地でも恐るべき除役・除厄に救いを求めたのは霊力のある外来神であった。この『八王子祭文』では牛頭天王とその一族と我が国古来の神である素盞嗚尊との習合は明記されていない。

最古の蘇民将来護符

前項の『備後風土記』は逸文であり、古風土記としては現存していない。そのため、説話の内容は鎌倉時代に偽作（創作）されたのではないかと疑問視されていた。従って、この説話をもとにした信仰自体も、古代から伝えられてきたのかも疑問視されていた。事実、時代を推定できる「蘇民将

来護符」の考古学的出土品は西暦１３～１４世紀の中世の物が殆どで、唯一、壬生寺境内遺跡出土の木簡が西暦９世紀といわれていた。
　ところが、平成１３（2001）年４月、我が国最古の厄除け「蘇民将来護符」が長岡京市開田の長岡京跡から出土した。その特徴を要約すると次の通りである。
　１．長さ２７ｍｍ、幅１３ｍｍ、厚さ２ｍｍ
　２．両面に「蘇民将来之子孫者」と墨書
　３．上部に紐を通したとみられる小さな穴がある
　４．中央部には木の“くい（釘状）”がうたれる
札の寸法は非常に小さく、当時の人は「お守り」として携帯して、そのあと家の門扉などに「くい」で固定したのではないかと推測されている。
　木札の材質については不明であるが、伝承に依れば柳の木、桃の木、茅の輪などがある。
　この出土により、蘇民将来の信仰が桓武天皇延暦３（784）～１３（794）年の長岡京期以前から伝承されていたことが証明されたことになる。

参考資料「あれこれ万覚書」ホームページ作成者不詳

我が国での「蘇民信仰」の伝播

「蘇民将来信仰」の普及は神々習合の結果

　蘇民将来の呪法そのものが我が国に伝来したのはかなり古く、定かではないが、弥生時代に出雲系といわれるチベット地方の部族によって持ち込まれ、そして出雲の神である素盞嗚尊が武塔神と習合して広く民衆の間に信仰されたという説がある。この呪法・信仰が注目を浴び、公になったのは私が前項で推測した奈良時代後期から平安時代に入ってからであろう。
　考古学的にも、我が国最古の厄除け「蘇民将来護符」が長岡京市開田の長岡京跡から出土しており、蘇民将来の信仰が桓武天皇延暦３（784）～１３（794）年の長岡京期以前から伝承されていたことが証明されている。
　この呪法・信仰が注目を浴びるようになったのは、仏教・道教・陰陽道等の外来神の崇りや、大陸・半島からの渡来人による畿内の人口増加等から度重なる疫病が流行し、その除厄に朝廷の関わりがあったからであろうか。
　元々この信仰は、前項に紹介した「由緒書」や「祭文」に記されているように、蘇民将来と巨丹将来が厄神を尊崇するか否かで、将来の運命を大いに分かつという仏教的な説話・伝説を元に仏教はもとより道教・陰陽道

等が民衆掌握の為に自らの神を厄神や除厄神にみたてて、それぞれの地に説話・伝説を作り厄払いの呪いや祈りを行ったのが起源だと思われる。そのため我が国に伝承された時には、複雑な神々の習合がなされている。その事に付いては項を改める。

次項では、この信仰が我が国でどの様に伝播・浸透していったかを学習する。

仏教の興隆と神仏習合（あらまし）

飛鳥時代　用明２（587）年、蘇我・物部の権力闘争の結果，仏教派の蘇我氏の勝利となり、仏教は大和朝廷に支持され、聖徳太子（推古元～３０年西暦 593～622 年に摂政となる）によって国家政治と密接となった。

この時期儒教・道教・陰陽道も伝来し、我が国の国家の形成には大陸思想が大きく影響した。特に仏教が興隆して国家の理念となり、奈良時代を迎えることになる。奈良仏教は国家仏教・学問仏教・呪術仏教といわれ、思想信仰としては高度のものとはならなかったという。学問仏教として取り入れられた輸入仏法に対して、行基（西暦 745 年大僧正）・鑑真（西暦 754 年渡来）などの社会救済仏教が次第に発展し旧仏教に対抗し、やがて弘法大師・伝教大師へと繋がる。弘法大師・伝教大師の入滅後、天台・真言は旧仏教が新仏法を排斥するにあたり、仏典によると、「我が国古来の神々はもともと仏法を守護するものである」といい、インド以来の護法神と日本古来の神とを同一にして説いた。日本古来の神々をもって仏法守護の神と説き、さらに神々は仏法の効力によって救われるとまでいうことによって、民衆を旧仏教に引きとめようとした。神道も両部神道と称して道教や陰陽道祭祀形態を取り入れ対抗した。これが世にいう「神仏習合」の始りであり、奈良時代後半（西暦８世紀中期）の頃である。

仏教を含めた外来思想（道教・陰陽道）の影響を受けた牛頭天王の霊力と結び付けられた「蘇民信仰」も「神仏習合」の結果として、我が国に広くこの信仰・伝承が広まったといえよう。

参考資料　日本歴史２　古代２　古代宗教論　原田敏明　岩波書店
現代新百科事典６　奈良時代　田村芳朗　小学館

除疫神と神仏習合の神社

１．疫隈国社

祭　神　素盞嗚尊を主祭神として、稲田姫命、御子神の八王子。

歴　史　社伝によれば、飛鳥浄御原京時代の天武天皇治世の白鳳７

（679）年頃の創建。延喜式神名帳〔醍醐天皇延長５（927）年に完成〕には「須佐能袁能神社」と記載。

神仏習合により、「天王寺」という別当寺が作られ、牛頭天王を祭神とするようになり、天王社、祇園社、江熊祇園牛頭天王社などと呼ばれるようになった。

明治の神仏分離により祭紳を素盞嗚尊に改め、社名も「素盞嗚神社」に改称した。

因みに、『備後国風土記』の編集時期は元明天皇和銅６（713）年の風土記撰上の詔と聖武天皇天平６（734）年当社を広峯社へ移したといわれる西暦 713～734 年の奈良時代初期と推定される。

２．広峰社（播磨国広峰山）

祭　神　素盞嗚尊、疫神牛頭天王

歴　史　天平６（734）年吉備真備、唐より帰朝の際当地で異神（牛頭天王）を見たとして、疫隈国社を播磨国広峰山に奉祀（京都祇園社に勧請されたのち、醍醐天皇の寛平９（897）年に再興された）。

貞観１８（876）年僧円如が広峰山から山城国八坂郷に移した（疫隈国社、広峰社が祇園社（八坂神社）の元宮とされる）。

３．八坂神社（祇園社）と祇園祭

祭　紳　新羅の牛頭山に座す素盞嗚尊。疫神牛頭天王。

歴　史　崇峻天皇２（589）年　八坂造、法観寺（八坂塔）を建立。

斎明天皇２（656）年　高麗の調度副使節伊利之使主（八坂造の祖）が氏神として祀る。

天智天皇６（667）年　社号を祇園感神院として宮殿を造営。

清和天皇、貞観１８（876）年　常住寺の僧円如、牛頭天王（天竺の祇園精舎守護神）を広峰山から八坂郷の樹下に迎え、祇園寺と呼びその中に垂迹した牛頭天王の祠を祇園社というようになった。

陽成天皇元慶年間（877～884 年）精舎を作り観慶寺祇園天神堂を建立。

円融天皇、天延２（974）年　天台別院とされ延暦寺に末寺化され、神仏習合の色彩が一層強くなった。

祇園祭　貞観５（863）年　御霊会は奈良時代から平安時代にかけての政治的に失脚した人々の霊魂がもたらす災いを鎮めようとしたもので、早良親王（桓武天皇の実弟で長岡京造営の反対運動に配下が連座し冤罪を訴えたが獄死。西暦 785 年）等五人の霊を鎮めるために、神泉苑に御霊会を修したという記録があるという。

この御霊会は牛頭天皇とは関係なく催行された。

また同時に、「京畿七道の諸人、事を御霊会に寄せ、私（ひそ）かに徒衆を聚め、走馬騎射することを禁ず。小児の聚戯は制限にあらず」とあり、それ以前から随分盛大に行われていたのではないかといわれている。

清和天皇、貞観１１（869）年　疫病の流行を鎮める祈願として卜部日良麿が、日本全国の国の数である６６本の鉾を立てて牛頭天王の祟りを鎮め、御輿を紳泉苑に送って災厄除去を祈ったのが御霊会に始まりという。この様に御霊会の起源は牛頭天王とは関係なく始まったが、祟りが治まらないため、祇園社に祀られている偉大な神格の神に祈ったのが、現在の御霊会の始まりではないかといわれている。

４．津島神社

祭　神　素盞嗚尊、大国主神、牛頭天王

歴　史　社伝によると欽明元（540）年　新羅国の牛頭山に御座す素盞嗚尊が対馬を経て鎮座。然し史書の何れにもあらわれてこない。津島の社名の初見は平安時代末期の高倉天皇安元元（1175）年である。

古くは津島牛頭天王社と称し、一條天皇正暦年間（西暦 990～994 年）に天王社の号を賜り諸国天王社の本社となると言われているが、牛頭天王名を冠した初見は鎌倉時代（西暦 1200 年台）に入ってからであり、文書・金石の銘文に牛頭天王と一般的に称するようになったのは室町時代後小松天皇応永１０（1403）年以降と比較的新しい。全国に３千の分霊社がある。

当社は八坂神社とともに式内社に列せられていない（西暦 929 年）。仏教色が強かったためか、存在が認知されていなかったか。

民間信仰として、「蘇民将来説話」が畿内に伝承されるようになったのは八坂に素盞嗚尊＝牛頭天王が祀られた斎明天皇４（656）年前後のことではないだろうか。『備後国風土記』の疫隈国社の創建（西暦 679 年）とも相前後する事になる。

「蘇民将来信仰」が朝廷を巻き込んだ鎮魂の御霊会となったのは、かなり時代が降るが、清和天皇貞観５（863）年と伝えられている。また同時に、「京畿七道の諸人、事を御霊会に寄せ、私（ひそ）かに徒衆を聚め、走馬騎射することを禁ず。小児の聚戯は制限にあらず」とあり、民間の間ではそれ以前から密かに、随分盛大に行われていたのではないかと思われる。

この様に御霊会の濫觴は祇園社ではなく神仙苑で始まったが、祟りが治

まらないため、祇園社を祀り偉大な神格の外来の神に祈ったのではないかと思われる。

祇園社が初めて勅願の社になされた濫觴は、『社家条条記録』「八坂神社記録上」によると「元慶元（877）年、疫疾霊瘡天下に起き、貴賤尊卑方術に迷う。神祇官陰陽蜜ト□の指す所、辰巳の角神の御祟に依って、伊勢大神宮に発遣せらるるといえども其の減無しの間、重ねて稲荷社に進められるといえども、又もって其の減無しの間、勅使をもって辰巳の角方の神明を尋計せらるの処、祇園社御座の由。奏聞を経るに依って、勅使を発遣せらるの処、祇園社に於いて官幣を宝前に奉献せらる。この時にあい、疾病すべて除去す。霊瘡無為の間、天神の威験を感ず。云々」とあり祇園社の地位を高めた。

以上を整理して、蘇民将来信仰（素盞嗚尊と牛頭天王）の広まりの経緯を年表形式でまとめると次の様になる。

区分	西暦	年　　号	事　　象	補　足　事　項
古代	540	欽明元年	津島神社創建（社伝）	新羅の牛頭山に座す素盞嗚尊＝牛頭天王が対馬を経て鎮座。実際は平安末期か
飛鳥	589	崇峻２年	八坂塔建立	八坂造　法観寺
白鳳	656	斎明２年	八坂に素盞嗚尊を祀る	伊利之、新羅の牛頭山に座す素盞嗚尊を氏神として祀る
	667	天智６年	八坂、社号を祇園感神院とする	仏教寺院
	679	天武白鳳７年	疫隈社創建	創建時は素盞嗚尊と武塔神が習合。 神仏習合により祭神が素盞嗚尊から牛頭天王となる。祇園社の本縁。茅の輪。
奈良	734	聖武天平６年	疫隈社　広峰社に勧請	遣唐使吉備真備が帰国時この地で牛頭天王の夢を見たとして奉祀
	741	聖武天平 13 年	信濃国分寺祭文	室町中期に書き写された物 牛頭天王は武塔天神の子 仏教・道教・陰陽道と習合 蘇民将来の子孫を示す柳の札をかける
	700年代	奈良時代後半から平安時代初期	神仏習合	弘法大師・伝教大師没後、天台・真言両宗により進められる。平安に至り頂点に達す
平安	784	桓武延暦３年	蘇民将来護符出土	長岡京跡　最古の護符
	864	清和貞観５年	神仙苑で御霊会	牛頭天王と関係なく始まるという記録があるがそれ以前から行われていた

	869	清和貞観１１年	祇園祭　神仙苑で始まる	牛頭天王の霊力を尊崇
	876	清和貞観１８年	牛頭天王　広峰社から八坂郷へ	僧　円如
	877	陽成元慶元年	祇園社　除疫の勅願社となる	社家条条記録　伊勢大神宮･稲荷社への勅願効果なし
	877～884	陽成元慶年間	観慶寺祇園天神堂建立	精舎を作る
	974	円融天延２年	延暦寺の末寺となる	天台別院
江戸	1700年代	江戸中期	伊勢山田　牛頭天王縁起・八王子祭文	外宮の神官が関る 津島神社の影響を受ける 信心施主の求めにより出張し勧請・読誦 神道・仏教・道教・陰陽道が習合。呪いの護符は無し

参考資料　上田市マルチメデア情報センタホームページ　蘇民将来符　その信仰と伝承
八坂神社の変遷と祇園会の源流　志賀剛　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版
祇園牛頭天王縁起の成立　西田長男　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版
祇園信仰　七つのキーワード　五島健児　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版
津島市史　津島市史編纂委員会　津島市教育委員会

東アジアにおける宗教・思想の成立と伝播

古代東アジアの宗教・思想

民間信仰的な「蘇民将来伝説」を大きくし成長させたのは、前項までに書き留めたように、インドに生まれた仏教、古代シナに生まれた道教・陰陽道更に我が国に於ける神道が和合し、自らの除厄神として呪いの物語を作り上げていった。その結果が現在の我が国に残る「蘇民将来伝説」であり､最早信仰というより伝説による風習となって一部の地域に残っている。

この信仰（伝説）に大きく寄与した仏教・道教・陰陽道の成立と伝播の歴史を簡単にたどってみる。

仏教の成立と伝播（あらまし）

西暦前５世紀頃インド北部に出現した釈迦（仏陀）により説かれたもので、釈迦の没後も時代、地域などに応じて発展していったものの総称をいう。インドにおいて仏教が一般に浸透したのは西暦２～３世紀である。

西暦紀元前後（２世紀頃という説もある）に中央アジアからチベットを

経て、前漢末期から後漢時代の初期に東アジア（古代シナ）に伝来した。西暦４世紀末までは西域出身僧が多くを占めていたが、５世紀の後秦では仏教が盛んとなり、教典の翻訳も進み直接インドに留学する者も出た。
朝鮮へは西暦 372 年に後秦から高句麗に伝えられ、384 年にはインドから直接東晋・百済を経て高句麗にもたらされた。新羅へは西暦５世紀に高句麗から伝わった。この経路を北伝といい主として大乗仏教である。

参考資料　仏教　田村芳朗　現代新百科事典７　学研

我が国の仏教

日本への公式な初伝は欽明天皇１３年・西暦 552 年（一説には 538 年）に百済からとされているが、私的には朝鮮に居住していた古代シナ人が公伝される以前に我が国に帰化し､ひそかに信奉されていたと言われている。
奈良時代には国家と固く結びつき、仏教により国家の安泰を図ろうとしたので、祈祷などを主とした。然し、空海・最澄が遣唐使となり唐から持ち帰った唐の仏教を模した学派的仏教が盛んになった。平安時代には天台宗・真言宗という独立的宗派が発生し、仏教の日本化も進んで、既に記した「本地垂迹説」などから日本の神との融合がみられた。後の鎌倉時代にかけて、浄土宗・真宗・日蓮宗などの宗派が生まれ、武士や庶民に支持された。然し中世後半には信仰としての生彩を失っていき、江戸時代には全く沈滞し明治維新の「廃仏毀釈」によって大打撃を受けた。現在では檀家制度のもとで葬式と祖先法要に終始し、一部を除き生きた信仰としての息吹きを失っている。

参考資料　仏教　田村芳朗　現代新百科事典７　学研

道教の成立と伝播

中国で儒教・仏教と共に三教の一つとされる代表的宗教。多神教（北斗星君、南極老人星）。普通老子を教祖とし老荘思想である道家とは別物である。古来の民間信仰や神仙説・仙術などを総合し更に儒教・道家をはじめとする様々な説が加えられたが､仏教のように宗教的に組織されたものでなく、特定の教祖はない。その目的も現在の幸福や不老長寿など、極めて現実的なものであり、あらゆる階級の人々に深く根をおろし、道教を除外しては現在の中国人や日本人の生活意識が考えられないほどである。
道教は後漢（西暦 25～220 年）末に始まり、病気治癒の祈祷や呪いを行って信者を得た。信者は天地水の三神を拝し、吉凶の判断を占った。道教

の主要素である神仙説は戦国末（西暦前 200 年代末期　始皇帝のシナ統一直前）に起った。仙人になるための神仙術を説くもので、不老不死を求めるものであった。

後漢後期に腐敗政治に苦しんだ農民は、各地で反乱を起こした。西暦 184 年に道教の一派太平道を信ずる農民が張角に率いられて決起した黄巾の乱で道教は民衆に広く支持された。

三国時代（西暦 220～270 年頃）以降になると道教の内容は次第に豊富になる。晋代（西暦 260 頃から 310 年くらい。三国時代のあと）以降になると、仙人になるための秘薬錬製の術が金丹道としてまとめられた。

この様に道教は老荘思想を土台として盛んになった。仏教や儒教と対立しながらそれらを適当に取り入れて発展し（要は習合）、南北朝時代（西暦 420～590 年頃）皇帝にも信者が出た。随（西暦 589～618 年）唐（西暦 618～907 年）北宋（西暦 960～1126 年）になると、儒・仏・道の三教が反発したり合一したりして、道教もその影響から理論的にも整備され豊かになっていった。

全真教・正一教・上清派・太一教（伊勢神宮の印に太一と書かれた幟がある）・真大道教の各派があった。

我が国への伝来は仏教や儒教・陰陽道などと同じ西暦５世紀頃に渡来している。律令制に採り入れられたが、民衆運動や政争に利用され廃止された。それに変わって台頭した陰陽師に道術が採り入れられ、道教の思想は現在に伝承されている。

特定の宗教的形態に整備されていない民衆道教は民間宗教と結んで様々な形で中国人のみならず我が国でも日常生活を支配して来た。正月をはじめとする各節句の行事・婚礼・葬儀など、日照りの雨乞い・蝗禍を打ち払う神や大水の際の竜神の祭りなど道教の思想や形式によって営まれるものは数え切れない。

参考資料　道教　有田和夫　現代新百科事典６　学研
漢　鶴見尚弘　現代新百科事典３　学研

陰陽道の成立と伝播

陰陽五行思想は、本来古代シナの哲学だったが、我が国においては次第に人生を支配する観念を生じ、更に禁忌・呪占などと結びついて俗信と変わった。

陰陽五行思想は西暦前５世紀頃に陰陽道と五行説、八卦などと共に成立し、西暦紀元前後に儒教、天文（惑星の五行分類など）、暦数（時刻と暦、日や年の

十干十二支表現）、医術（内臓の五行分類、漢方など）、風水（方位、鬼門など）などと合体して自然を記号的に表す自然哲学として成立した。

この思想は我が国には、西暦６世紀（飛鳥時代）に伝来し、更に道教の呪術が強力な要素として加わり、朝廷でよく使われるようになった。西暦８世紀末に完成した平安京には鬼門封じなど、陰陽道の魔除け（風水）があちらこちらに使用されていることは有名である。

西暦９世紀末の平安時代後期には貴族の間に陰陽道の占が大流行し、延喜２１（921）年には有名な安倍清明（延喜 11～寛弘２年　西暦 921～1005 年）が誕生した。

我が国独特の陰陽道を支えた陰陽師には神道系、仏教系（修験者を含む）、一般庶民の３種類いて、特に矛盾なく存在していた。

参考資料　陰陽道　松井純一郎　現代新百科事典　２　学研

蘇民将来信仰に登場する神々たち

素盞嗚尊と牛頭天王・武塔神

蘇民信仰（牛頭信仰）の主役となる素盞嗚尊と武塔神そして牛頭天王の三神は厄神と同時に厄除けという共通点で習合されている。

宗教史における習合という現象は我が国ほど豊富な資料を提示する所はない。牛頭天王信仰は古代インドにおいて成立した仏教と古代シナにおいて発生した道教・陰陽道と、我が国固有の神道との習合によって生み出された新しい我が国の神祇なのである。更に朝鮮において発生した民間宗教をも合揉し来っていると思われる。それをやや詳しく調べて見る。

参考資料「祇園信仰」七つのキーワード　五島健児　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版

我が国古来の除疫神・素盞嗚尊

素盞嗚尊は『日本書紀』の一書第４に曰くとして「素盞嗚尊の所行、無状し、故れ諸神科（おほ）するに千座置戸（ちくらおきと）を以てして、遂に逐（やら）ひたまひき、是の時に素盞嗚尊、その子五十猛神（いそたけるのかみ）を帥（ひき）ゐて、新羅国に降到（くだ）りまして、曽尸茂梨（そしもり）之処に居（ま）します。乃ち興言（ことあげ）して曰はく、此の地（くに）吾不欲居（あれをまらくほりせじ）とのたまひて、遂埴土（はにつち）を以て舟を作り、乗りて東に渡り、出雲国の簸川上（ひのかわかみ）に在る鳥上（とりかみ）の峯（た

け）に到ります」と記述されている。
　高天原での乱行の結果厄神とされたが、出雲に帰り大蛇退治で除厄神とされ、更に高天原より降ったとされる新羅の曽尸茂梨は韓国語のソシ(牛)、モリ（頭）といわれ、ソシモリ山（牛頭山）は現存するという等など牛頭天王と素盞嗚尊の伝説には共通点がある。
　斎明天皇２（656）年　高麗の調度副使節伊利之使主（八坂造の祖）が氏神として八坂に新羅の牛頭山に座す素盞嗚尊を祀ったということは既に記した。素盞嗚尊は『古事記』や『日本書紀』に記述される我が国古来の神である。
　『備後風土記』における疫隈社の祭神は素盞嗚尊と武塔（答）神と習合している。牛頭天王ではない。

参考資料　日本書紀　１　神代　上　小学館

東アジアで習合した除疫神・牛頭天王

　牛頭天王は蘇民将来伝説の主役神であり、それぞれの宗教の神々に比定され豊富な別名を持つ。
　牛頭天王という名は新羅国に牛頭山（この名の山はインド、東アジア大陸にもあるという）という山があり、何れの山でも疫病に効果のある栴檀（せんだん）を産出したことから、この山の名を冠した天王を疫病に効く神として崇めたことによるともいう。この牛頭天王の疫神信仰がインド密教（西暦７世紀後半に成立）と結合し、更に陰陽道（西暦前５世紀頃成立）の信仰と混ざり合って唐の時代（西暦７～８世紀）に朝鮮に入り、朝鮮の民族信仰とも混ざり我が国に伝わり素盞嗚尊（西暦７世紀中葉）との習合がなされたともいう。
　志賀剛氏の説によると、牛頭天王の源は古代シナの神農民のごとき「牛首人身像」であったらしい。この思想が朝鮮にも伝来し、春川の曽尸茂梨（牛頭山）では豊作より疫神として信仰された。すなわちソシモリの神に疱瘡の免疫のために供えた牛頭が聖化して牛頭天王となったという。村上智順氏の「朝鮮の鬼神」に依れば、牛を殺してその生き血を門に塗れば疫神が恐れて退散するという伝説がある。疱瘡は人のほか牛馬羊などにも発生し、牛庖は人に感染するが人には弱毒で免疫となり症状は軽い。古代の牛頭天王は牛の生き血に依る疱瘡の免疫性を招く除疫神として神聖化されたものと思われるなど様々な説が存在する。
　つまり、牛頭天王は、古代インドでの牛の聖獣説と牛首人身像をしていたとされる古代シナの神農民が習合して豊作の神としての信仰が興り、更に朝鮮半島に渡ってからから除疫の神として信仰が高まった。牛の疱瘡免疫の呪（まじな）いが習合したのではないか。この信仰と呪いはそれぞれの

伝承地においてその霊力を高めるために、その土地々々での民衆を掌握するためその地に合った「蘇民将来伝説」を生み、そしてその地の神々との習合が生まれたいえる。医療の乏しい古代にあっていかに除疫の信仰・呪いが重要であったかを物語っている。

牛ではないが羊の血を厄除けにしたという話は、旧約聖書の出エジプト記に、エジプトで奴隷であったイスラエル人が神ヤハエルによって救い出された（西暦前 1230 年頃）と記録として残っている。所謂「過越しの祭（Passover)」の起源である。ヘブライ（イスラエル）人を解放しようというモーゼ（西暦前 13～12 世紀の古代イスラエル最大の預言者）を拒絶するファラオ（エジプト）を、ヤハウエが領内の初子を殺すという災厄で襲ったとき、予め家の門に小羊を屠りその血をヒソプという植物の束に浸し、目印をつけるよう指示されたイスラエル人の家には、その災厄が過ぎ越していったというものである。従ってこの日は記念すべき日なので主（ヤハエル）の祭として祝い代々にわたって守るべき不変の定めとしなければならないと旧約聖書に述べられている。これは「蘇民将来説話」の内容と酷似しているが、この説話では「牛の血」となっているが、「過越し祭」では「羊の血」となっているのは、牛は農耕民族の象徴であり、羊は遊牧民の象徴であって、身近な家畜だったからだといわれており、「過越し祭」の説話が長い年月を経て中東から東アジアに伝来する間に、それぞれの民族に順化したのではないか。現に琉球地方に「看過」と呼ばれる牛を屠ってその血を家の門口に塗るという厄払の風習があるという。

このように牛頭天王の来歴に就いては何度も繰り返すが様々な説がある。その他にも、朝鮮、満州、蒙古の檀君だという説、古代シナの盤古だという説、仏教の経典では帝釈天インドラだという説もある。ホータン王国（新疆ウイーグル自治区）でも牛頭伝説がある。更に遡ってペルシャ（イラン）のミトラ神、古代ヘブライ（イスラエル）人のタゴン神、古代フェニキア（シリアの地中海東岸部）のバアル神まで辿れる。そしてシルクロードからメソポタミア（イラク中心部）にまで行き着く。

或る蘇民将来伝説では、蘇民将来は、「隼鶏」という宝船を牛頭天王に貸し与えているという一説がある。この神話における牛頭天王というのは、人身牛頭のバアル神の事であり、蘇民将来というのはソロモンの宮殿を建てたファニキア人の王でバアル神の祭祀者ツロのことであり、蘇民将来が与えたという宝船はツロがソロモン王に与えたタルシシ船のことであるともいう。

此れから察するに「蘇民将来説話」は遥か西暦前 13～12 世紀に遡るユダヤ教から引き継いでいるという推定も出来そうである。人類の文化の発祥は中東であることを物語っている様にも思われる。

鎌倉時代末期（西暦１４世紀初期）に成立したといわれる陰陽道『三国

相伝陰陽管轄【ほき】内伝』には、祇園社祭神が陰陽道の神に比定されており、牛頭天王は天道神として「天道神は牛頭天王也。万事大吉向此方蔵袍衣。鞍置始一切所求成就所也」とある。姫神の婆利采女は歳徳神、其の子八王子は八将神としてその座する方向での吉凶が記されている。

室町時代（西暦１４～１６世紀）に成立した『神道集』には牛頭天王に数多従神囲繞の神々の中に道教の神である「東王父・西王母」を父母としてあげている。鎌倉期初期（西暦１２世紀末期）『伊呂波字類抄』にも同様の記述がある。また、牛頭天王は赤山大明神、赤山大明神は泰山府君、といわれることから牛頭天王は泰山府君と同体であるとされる。泰山府君は道教における冥界（死後の世界、冥土）を司る神であり、更に泰山王（エンマ）とも同体視されるようになった。

牛頭天王は「蘇民将来信仰」が東アジアを東進する過程で、古代シナで成立した陰陽道・道教によって一体化し、より強力な除厄神となっていった。我が国に伝来された時には既に陰陽道と道教とにより同化されていた。

このように我が国においても牛頭天王の霊力を強調しようとする人々がいた。

参考資料　八坂神社の変遷と祇園会の源流　志賀剛　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版
祇園牛頭天王縁起の成立　西田長男　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版
祇園信仰　七つのキーワード　五島健児　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版
今日は何の日「過越祭』　ホームページ布忠 COM　著者不明
修験道と神道　ＧＬＮホームページ　発行者不詳
日本神話ルーツの謎　鹿島昇　　神国民社

蘇民信仰最初の除疫神・武塔（答）神

『備後国風土記』の疫隈社についての蘇民将来説話の中に

「昔、北の海に座しし武塔（むた）の神、云云。……即ち詔りたまはく吾は速須佐雄（はやすさのを）の神そ。云云。」

『信濃国国分寺祭文』には

「抑（そもそも）昔し、武塔天神之本誓（ほんぜい）伝え請い給わルニ、是レ自（よ）リ二十万河沙（ごうがしゃ）ヲ去リテ須弥山ヨリ北にケイロ界ト云う処有り、並に白キノ御門ト申す、其御子、今之牛頭天王（注　昔の名前には触れていないが武塔神か　私の注）云云。」

『牛頭天王縁起』（神宮文庫蔵）に依ると

「抑牛頭天王ノ根源ヲ尋奉レハ、須弥半腹豊饒国ト云国有、其国ノ主ヲハ武塔天王ト申。太子一人御座、御名ヲハ武答太子ト申奉。云云」

とある。

インド仏教の中で生まれた慈悲ある人は救われるという蘇民将来信仰に最初に登場する疫神・除疫神は仏の守護神である武塔天王の王子である武答（塔）天王であるといえる（武塔と武答の混乱はあるが　私の注）。

我が国においては、インド仏教の中で生まれた蘇民将来信仰に登場する除厄紳は武塔天王であったが、その後、東アジアで道教・陰陽道が習合・合体して伝来された。中世になると、武塔神の太子（武答神）が牛頭天王となり、太子の牛頭天王が父よりも強力な疫神とされるようになった。そして牛頭天王が祇園に迎えられたのは西暦９世紀末～１０世紀初である。『日本紀略』によると延喜 8～10（908～910）年と疾疫記事が続いている。

神宮文庫蔵の『牛頭天王縁起』には

「（太子）八歳御時ニ、其ノ御背五尺ニ現シテ、御面三面顕タマヒ、又額ニハ十一面現タマフ、御頂三尺ノ牛角生ヒ出タマフ、赤色ノ角生出タマフ間、父大王、是ハ不思議ノ太子、化生王子タリトテ、御位ヲ辞シテ、彼太子ヲ御位ニ付奉。牛角生出タマフ故ニ、牛頭天王申奉、云云」

として聖獣の牛に関連付けている。

インドでは牛が聖獣とされ、牛の肝から得る薬を牛黄（牛王）といい、牛王加持したり、神の使いなどを図像化した符に牛黄の印肉を押した御符を牛王宝印として珍重していた。この信仰が古代シナに伝わり各宗教と習合して「牛頭天王」という名に変わっていったと思われるが確かではない。

参考資料　祇園牛頭天王縁起の成立　西田長男　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版
修験道と神道　ＧＬＮホームページ　発行者不詳

蘇民信仰の受益者受難者・蘇民将来兄弟

どの『縁起』『祭文』でも富める弟は除疫神の困窮を助けなかったため、その怒りをかい除疫神から行疫神と化した神から受難の運命をたどった。

貧困の兄は貧しいながらも厚く持て成したため災難を免れ、子々孫々にわたり繁栄するという話の筋はどの説話でもほぼ一致している。然し、兄弟の名前が微妙に異なる。除疫の神の名前がそれぞれの宗教の神になぞらえているのにたいして、受益者・受難者の将来兄弟は霊力を高める必要がないためか、それぞれの宗教上の特定人物に比定されてはいない。この名前の違いの理由はこの説話の伝承経路の違いによるものであろう。蘇民将来の名前の構成から、古代シナ・朝鮮半島・モンゴル系ではなく、インドの梵語を漢訳したものであろうと思われる。

この説話に登場する主な人物（神）を伝承別に表示すると次のようになる。

	備後風土記	信濃国分寺祭文	伊勢牛頭縁起 伊勢八王子祭文	【ほき】内伝 （祇園信仰事典）
蘇民兄弟の名	名前は特定されていない	蘇民将来（受益） 小丹長者（受難）	蘇民将来 巨丹将来	蘇民将来 巨丹将来
除疫神名	武塔の神＝速須佐雄の神	牛頭天王 武塔(答)神（幼少名？）	牛頭天王・金剛自在天・武答天王など 武答太子（幼少名）	牛頭天王 もとは 商貴帝・天刑星
魔除け呪	蘇民将来の子孫と唱え、茅の輪を腰につける	蘇民将来之子孫也と書いた柳の札を身につける	僧侶（？）が施主の家に蘇民将来之子孫家として出向き祭文を読誦（縁起） 茅輪を作り右腰に着ける（祭文）	桃木札に「急急如律令」と書き女の袂へ弾き入れる 呪いに「蘇民将来」があらわれない？
成立時期	西暦７世紀後半 白鳳時代前半	西暦８世紀中葉 奈良時代中葉	西暦１８世紀中葉。江戸時代中葉	西暦１４世紀初頭？。鎌倉時代末期。
伝承経路	仏教・神道	仏教・陰陽道・道教	神道・仏教・陰陽道・道教	陰陽道（道教を含む）

参考資料　祇園信仰事典　真弓常忠編　戎光祥出版

七難即滅・七福即生について

七難・七福とは

伊勢志摩地方の戸口に飾られている注連飾に付けられた護符の表面中央に大書された呪文「蘇民将来子孫家之門」の左脇に「七難即滅」、右脇に「七福即生」と書かれている。此れは何を意味するのか考えて見る。

西暦５世紀初頭に古代シナ後秦の国師鳩摩羅什（くまらじゅう）による仏教経典の翻訳とされる『仁王護国般若波羅密経（仁王経）』の中に七福神信仰の嚆矢といえる「其国土中有七災難。一切国王為此難故、講読般若波羅密、七難即滅、七福即生、萬姓安楽、帝王歓喜。」という一節がある。

この経典は国の安泰、隆昌を仏教的に説く経典で、最澄が入唐帰朝後の平安時代、延暦２４（805）年に興した天台宗の根本経典の一つとなった。

伊勢志摩地方の戸口に飾られている注連飾に付けられた護符に書かれた「七難即滅・七福即生」と七福神信仰との関連は後で学習する。福神は時代により変遷したが、現在の七福神になったのは室町時代から江戸時代初期（西暦１６～１７世紀初期）にかけてであるといわれている。

では、この七難・七福とはどのようなものであるかを調べて見る。

七難とは

七難については「仁王経」や「法華経」などの経典に説かれているが、「仁王経」によると次の七つの天災・人災が説かれているという。

1．日月の難：日月失度難といい、赤日・黒日・二三四五の日が出・日蝕無光・二三四五重輪を現ずる等々、太陽や月が変怪を起こすこと。
2．星宿の難：衆星変怪難といい、諸星が各々その運行に異変をあらわすこと。
3．火災の難：諸火焚焼難といい、様々な原因によって起る火災が人々を苦しめること。
4．水害の難：時節反逆難といい、暑い夏に雪が降って寒く、寒い冬に雷雨があって暑い。又大洪水が起ること。
5．風害の難：大風数起難といい、大風がしばしば吹き荒れて人家を倒壊し、国土・山河・樹木が一時に荒れ果ててしまうこと。
6．旱魃の難：天地亢陽難といい、強い日照り続きで作物が枯れ、五穀も実らないこと。
7．戦乱盗賊の難：四方賊来難といい、国の内外に賊が起って国を侵すこと。

「薬師経」には七難については人民疾疫・他国侵逼（外国の侵入）・自国反逆（内乱）・星宿変化・日月薄食・非時風雨・過時風雨を説き、「法華経」には火難・水難・羅刹（悪鬼）刀杖・鬼・枷鎖（とらえられる）・怨賊の七難が記されている。その何れもが、正しい真理（正法）に従って生活していないと、このような災難がおそいくると警告し、同時に仏教信仰の勧めを示すものである。

七福と七福神信仰

人は禍福を思って悩み、「福運」を求めるが故に神仏の信仰が生まれたといえる。然し「福運」「開運」といっても人それぞれの願望が異なり、一様ではない。経典に示される「七福の徳目」が果たして何々であるかは明らかではないが「七神」を当てて人々の願望をかなえる「七福神信仰」が平安時代（西暦 748～1185 年）に興り、室町時代（西暦 1393～1572 年）にかけて盛んになり江戸時代に其の最盛期を迎える。

然し、最初から七福神が揃っていたわけではなく、最初の福神として現れたのが、大黒天（大黒様）である。最澄が比叡山延暦寺に三面六臂大黒天を祀ったことから始まる（延暦寺創建西暦 788 年）。最澄が厨房の神として唐から伝えた。

一神だけでは心細いと次に現れたのが恵比寿神で二神並立となる。西宮の西宮神社にはヒルコノミコトが漂着し、ヒルコ大神（事代主命）として祀られているとされるため、ここから恵比寿信仰が広まったとされている。大黒様と大黒天が混同され二神並祀となる。

二神だけでは満足できず更に一神が付け加えられ三神並立となる。弁財

天である。厳島神社の三祭神（女神）のうち市杵島姫が弁財天と習合し弁財天信仰の「総本社」となった。

そして、四神目に毘沙門天が選ばれた。京都の鞍馬寺は北方守護のため建立され、毘沙門天像を祀る。所謂「鞍馬の毘沙門さん」である。

五神目に布袋が登録された。古代シナの禅僧隠元が京都黄檗山万福寺に布袋像を祀らせ布袋信仰を広めた。

この五福神が室町時代の京都で一般的になった。

この信仰が江戸に伝わるとすぐ二神が付け加えられた。即ち、寿老人と福禄寿という星の神である。この二神を主神とする寺社は少なく、「七」にこだわる添え物の感じが強い。「七」を聖数と見ていたからである。

日本の民族信仰は、現世は豊かに楽しく生活して、悩みはこの世で解決しようという現世利益の考えが強く、神仏と仲良く付き合うという発想が「七福神信仰」にも現れている。神仏にお参りするということは、不安や悩みがあるからで、そういう人間の気持ちが沢山の神々を作り出したともいえる。

メソポタミア、インド、中国起源の神々が、シルクロード経由で入ってきて日本神道に濃厚な影響を与えていること、そして、七福神はもともと古代シナやインドの神々であり、古代シナやインドに派遣された僧侶、古代シナやインドから来た僧侶が中心になってそれらの神々を移入させた。

では、七福即生の「七福の徳目」に七神が登場したため、それぞれの神々の役割が決められ、徳目に対応する七福神を割り当て福寿の効果を強めた。

次の表にまとめた。

七福の徳目	対応七福神	由来	特徴・七福神の御利益
延命長寿	寿老人	道教	福禄寿と同神異体。福禄寿より早く伝わり仙人像で表現。延命長寿。・諸病平癒・富貴繁栄。
富財裕福	大黒天	仏教	仏法を守る戦闘的な怒りの神。夷と並ぶ代表的な福神。怒りと慈悲の性格を兼ね備えていた。福神として室町時代中期以降に七福神となった。農村では農業の神とされ、大袋を背負い打ち出の小槌を持って米俵お踏まえる像で表現。富財（金運良好・資産増加）・開運出世・家内安全・子孫繁栄。
人望福徳	福禄寿	道教	寿老人と同神異体。古代シナでは福寿を司る南極星の精と考えられ南極老人・福禄寿星などと呼ばれた。室町時代に寿老人と別神と成り長頭短身の像で表現。人望・長寿・富貴繁栄。
清廉度量	恵比寿神	神道	古くは漁民に信仰された神。大黒天と並ぶ代表的な福神。夷・戎・恵比須とも書く。風折烏帽子に狩衣姿・海中の岩に腰掛け破顔微笑して鯛を左脇に

			抱え右手に釣竿を持った神像で表現され（近世以降）広まった。西暦１３～１４世紀に至って市場の守護神となった。水と縁があり、海上交通安全・漁業・水商売守護・サービス業守護・貿易・商売繁盛・正直。
威光福寿	毘沙門天	仏教	四天王の一つで北方を守る神。常に如来の説法を聞くところから多聞天ともいう。我が国では福寿を授ける神とされ広く民間信仰の対象になる。身体は黄色で七宝の甲冑をつけ怒りの相を表す像として表現。悪霊を退散させ、無量の知恵を授ける。威光・仏教守護・知恵・開運福徳・出世。
大量富貴	布袋尊	仏教	古代シナ唐末（西暦 907 年滅ぶ）から後梁（西暦 907～923 年）のころ実在したと言う禅僧・名は契此。身の周りのもの、寄付されたもの一切を入れた袋を背負い、肥った腹をあらわにし子供と遊ぶ姿が盛んに画かれ、布袋さんとして親しまれた。肩の大袋を堪忍袋といい、寛容で度量の大きいことを表す。大量・人格形成・富貴繁栄。
芸道愛敬	弁財天	仏教	女神。インドで河川神として崇敬。ヒンズー教ではブラーフマンの配偶者、仏教では閻魔王の姉などとする。一般に水辺に祭られ、我が国では八臂像が作られ、琵琶を弾じる姿が多い。芸道（芸術・芸能・文学）・弁舌・学問の才能と幸運授与、金銀財宝授与。

七福神信仰の広まり

南北朝期から室町時代にかけて、世俗信仰が高まり、世俗の幸福追求ということから、種々の信仰が起こった。七福神信仰もその一つであろう。

なかでも上野寛永寺の開祖天海僧正が徳川家康に「仁王護国般若波羅密経（仁王経）」の経典に説かれている教えを篤く信じ行えば、「七難即滅し七福即生する」と説いたという。家康は狩野法眼深幽に七福神の絵を描かせて尊崇したという。これを各大名が見習ったため全国に広まったといわれている。西暦１７世紀初頭の江戸時代にいたり七福神信仰は大いに盛んになり、宝船に相乗りの七福神の絵がえがかれ、民衆の中に広く定着し、江戸市中では正月の七福神詣でも盛んに行われるようになったのは江戸時代中期のようである。江戸で始まったこの風習はほどなく京都、大阪でも盛んになり、それが全国に広まる事になる。七福神の伝播に大きな役割を果たしたのは、僧侶、商人であり武士である。

本稿のテーマである伊勢志摩地方の「蘇民将来護符」に書かれている「七

難即滅・七福即生」という経典の教えが呪文となったのは桃山時代以降江戸時代に入ってからではないかと思う。後項で学習するが、志摩国の七福神に対応している寺院の創建は西暦１６世紀の中期から後期である。

参考資料　七福神信仰事典　宮田登編　戎光祥出版
七福神信仰の大いなる秘密　久慈力　批評社
七難　田村芳朗　現代百科事典４　学研
七福神　田村芳朗　現代百科事典４　学研
（株）ＪＡＦサービス　ホームページ他
夷　松井純一郎　現代百科事典２　学研
大黒天　柳川啓一　現代百科事典５　学研
布袋　柳川啓一　現代百科事典８　学研
福禄寿　坪井洋文　現代百科事典７　学研
毘沙門天　大森曹玄　現代百科事典７　学研
弁財天　花見恭　現代百科事典７　学研

急急如律令について

急急如律令とは

律とは、人間の行いをきちんと秩序だてた決まりのことである。我が国においては、奈良・平安時代に、唐の刑法典にならって定められた刑罰についての基本法のことをいう。大宝律・養老律がその例である。

令とは、神のお告げや、君主・役所・上位者の言いつけのことであり、掟・命令・御達しの類と言える。

「・急如律令」の文言は古代シナ漢代の公文書の末尾に書かれた決り文句で「急いで律令の如く行え」の意である事は周知の通りである。元来、漢代においては律令に明記されていない事項を行う場合には、文末を「如詔書」と結び、既に明文化されて場合には、「如律令」と結ぶのが詔書執行の形式であった。

後漢末期（西暦３世紀初期）頃より道教が「呪いの威力を速やかに伝えよ」という意味の呪文に採り入れたものを、陰陽師が吸収して、「急急如律令呪符退魔」の様に頻繁に呪文に付加して用いる様になったという。

参考資料　漢字源　学研
フリー百科事典　ウイキペディア

「急急如律令」呪符木簡出土の意味

「急急如律令」の木簡は「蘇民将来護符」を考える上で重要である。西暦６世紀後半に成立した古代シナ南北朝時代の道教経典『玄都律文（どのような経典かは不明　私の注）』などに、悪魔退散の字句として使われ出したとされているが、後漢代の墓から木札護符（霊符）が出土したことを考えると、既に、３世紀には呪言・呪符として既に使われ始めていたようである。そして唐代には瘧病（マラリヤ　私の注）対策の呪文にもみえることから、「急急如律令」は「蘇民将来之子孫也」の呪文と同様に或いは同時に、除病を目的として使用されていたといえる。

この「急急如律令」の呪言・呪符は、「蘇民将来呪文」と共に古くから日本列島にも伝わっていた。木簡が出土した遺跡の代表例は次の通り。

奈良県橿原市の藤原京（西暦 694～710 年）

宮城県・多賀城遺跡（西暦 724？～）

平安初期の病気治療を目的とした「天罡（てんこう）」木簡が出土している。「天罡」とは道教の神（北斗星）を示し、「罡」の字は疫病を逃れ疫病を移さない呪字とされる。「天罡」と「急急如律令」という文字が記されている。この二つの組み合わせから、この木簡は天変地異を止め、病気を治し、死者や祖先の鬼（魂）を救い、現世の人々の幸福や安堵を祈って作製されたものであろう。

静岡県浜松市・伊場遺跡

平安時代初期（西暦８世紀末）のものといわれる「百怪呪符」と呼ばれる著名な呪符「天罡木簡」が、川に突き刺さったままの状態で出土された。この木簡の使用目的は竜神に関連（止雨）するとの解釈もあるが、出土木簡に「疾三神」の語もあり、また、「天罡」と「急急如律令」という文字が記されていることなどからも、この木簡は疾病の除去など癖邪招福に関する可能性も充分あるという。

大津市関津遺跡（平安末期～鎌倉時代　西暦１２世紀）

沼地状の落ち込みから長さ 30.7 ㎝、幅 5.9 ㎝、厚さ 0.7 ㎝の呪符木簡が出土。表面の墨書のみ確認が出来、その中に「天罡」と「急急如律令」という文字が記されている。裏面には中央の側面よりに直径 1 ㎝の円と中心に点が線刻されている。この二つの組み合わせから、この木簡は天変地異を止め、病気を治し、死者や祖先の鬼（魂）を救い、現世の人々の幸福や安堵を祈って作製されたものであろう。

木簡の上下端（左寄り）に釘穴（２個一対）が開けられており、住居の軒先やはしらに打ち付けられていたものと思われる。

大阪市住吉区山の内遺跡（西暦１４世紀後半～１５世紀前半）

遺跡の井戸跡から出土した呪符木簡の表面に「昔蘇民将来子孫住

宅」裏面に「急急如律令」と書かれいる。

参考資料「あれこれ万覚書」ホームページ作成者不詳
陰陽道叢書４特論　村山修一ほか編　名著出版
鎌倉時代の集落跡と多量の木製品　滋賀理文ニュース　埋蔵文化センター
おおさか考古学百景　松本啓子ＨＰ

「急急如律令」呪文の伝来

「急急如律令」の呪言・呪符は遣隋使（西暦 607 年・608 年の小野妹子ら、614 年の計 3 回）・遣唐使（西暦 630 年から１３回、中止 3 回、894 年廃止）などが古代シナから持ちこんだと考えられる。西暦 625 年築造の武寧王陵から出土した買地権石に、「不従律令」の文字が見られ、これは「急急如律令」の変形語類だとも言われ、朝鮮半島からの渡来人が伝承した可能性もあるという。道教（陰陽道）の思想が遅くとも藤原京期（西暦 694～710 年）には既に日本に伝わっていた。前項の呪符木簡の出土からみて民間信仰としての「蘇民信仰」と「急急如律令」の呪文も同時に伝わっていたといえる。

参考資料「あれこれ万覚書」ホームページ作成者不詳

律令の結句から呪文への変身

一番応用範囲の広いお呪いの基本で、願望成就や現状打破のみならず、普段とっさに困った時などにも使える。殆どの霊符の文字は、この呪文を柱にしている。短い言霊であるが強力な呪文であると言える。例えば「急急如律令」と次項以降で学習する五芒星（セーマン）、九字格子（ドーマン）と幼児の虫封じのために作られた霊符もある。
この文字が律令の結句から呪文に変化したのは、道教（陰陽道）により、

律令の主旨を心得て律令のように早急に行うように
↓
早く願いがかなうように
↓
鬼神よすみやかに去れ

と変化して呪文になったといわれている。
また、「急急如律令」は吉凶を占うなどした陰陽道の呪い言葉で、本来は、急いで律令の如くすべしの意味を持つが、「令」は雷神の一族の神を意味す

る「零＝霊」に音が通じ、稲妻のように疾走して疫病などを早く直すとの呪文である。
藤巻一保氏によると『【ほき】内伝（前出）』に「爰に（牛頭）天王曰、我昔此国ニ到ル時、此松園中ニ一賤女有リ。巨旦奴ノ婢女ト雖モ、我ガ為ニハ恩徳人、彼女助ント欲ス。梅木札ヲ削リ「急急如律令」ノ（呪）文ヲ書キ写シ、指ヲモッテ彼牒ヲ弾カシメレバ。賤女ノ袂中ニ収マリ、然シテ此禍災ヲ退ク」という記述があるという。
ここでも、「急急如律令」は「蘇民信仰」と一対なって現れる。そして道教思想と一体になった陰陽道が関っている。

参考資料　急急如律令　松本啓子　おおさか考古学百景ホームページ
蘇民信仰と門符　岩田貞雄　ふるさと再発見　中日新聞H13-2-3
祇園信仰　七つのキーワード　五島健児　祇園信仰事典（真弓常忠編）戎光祥出版

「セーマン」について

「セーマン」とは清明桔梗紋

安倍清明は森羅万象を読み解き、鬼神を自由に使いこなし、吉凶を定め、未来をも見通した史上最高の陰陽師であるとされている（実在したか否かについては諸説ある）。彼が天地を構成する記号を組み合わせ、究極の呪符として完成させたのが清明桔梗紋（セーマン）であるという。これは五芒星（ごぼうせい）という形をしている。
さて陰陽道では五芒星を魔除けの呪符として伝えている。この印にこめられた意味は陰陽道の基本概念である陰陽五行説、木・火・土・金・水の五つの元素の相生・相克の理を表し、陰陽五行の象徴を図形化したものといわれている。

参考資料　Kukokiri.net ホームページ
セーマンドーマン　Wikipedia

陰陽五行説とは

陰陽五行説における五行とは、木・火・土・金・水の概念から発する循環と二元対立の思想である。
まず五行循環の原理は

五惑星…太極（北極星）から派生した二気の交感
交合…日月外五惑
星（五星）が生ず。五星とは木星・火星・土星・金星・水星のことで、古代肉眼のみで観測した時はこの五星が惑星の全てであった。
五原素…太極から派生した二気の交感交合…地上に五原素（木・火・土・金・水）が生ず。
五原素は兄弟（えと）という陰陽二元に次ぎの如く分化する（兄は陽、弟は陰)。即ち十干である。つまり

	木	火	土	金	水
兄（え）	きのえ（甲）	ひのえ（丙）	つちのえ（戊）	かのえ（庚）	みずのえ（壬）
弟（と）	きのと（乙）	ひのと（丁）	つちのと（己）	かのと（辛）	みずのと（癸）

であるという。

これに対して、陰陽（二元対立）の思想は、森羅万象を二元対立の相において捉える。即ち、

時間の対立として　冬・夏
事象の対立として　水・火、女・男
空間の対立として　山陰・山陽、東北・東南・西南・西北…中央（九方位…九星）

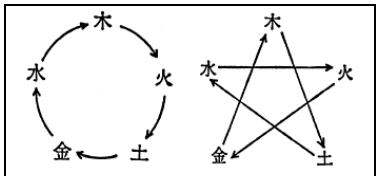
等々である。

参考資料　陰陽五行思想からみた日本の祭―伊勢神宮祭祀・大嘗祭を中心として
―吉野裕子　人文書院

相生・相克と五芒星

五原素の相互間に相生と相剋がある。

１．相生説とは
木生火、火生土、土生金、金生水、水生木　である。
右図の左の相関関係は、次のように
説明されている。



陰陽五行説　左が相生・右が相剋

木生火　木は燃えて火を生むから相性良し
火生土　火は灰となって土を生むから相性良し
土生金　土から金属が生まれ得られるから相性良し
金生水　金属から水が生じるから相性良し

水生木　水分があれば木が成長するから相性良し

２．相剋説とは

木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木　である。

上図右の相関関係は、次のように説明されている。

木剋土　木は土の養分を吸い取り成長するから木は土に勝つ

土剋水　土は水を吸い取るから土は水に勝つ

水剋火　水は火を消すから水は火に勝つ

火剋金　火は金属を溶かすから火は金に勝つ

金剋木　金属（例　斧）は木を切り倒すから金は木に勝つ

陰陽道では、この印にこめられた意味が、陰陽五行説の基本概念であるということで、五芒星を魔除けの呪符として伝えている。

３．五芒星（Pentagram）とは

前頁の図のような正五角星のことである。歴史的に確認されている最も古い五芒星の用法は、西暦前３０世紀頃のメソポタミアの書物の中に発見されている。シュメール人は下向きの五芒星を「角、小さな空間、穴」などの意味を表す絵文字としていたという。また、西暦前２０世紀頃のバビロニアでは五芒星の図形の各角に金星を頂点に木星、水星、火星、土星の五惑星を対応させるなどかなり歴史は古い。ピタゴラス学派（西暦前 5,6 世紀）や魔術・呪術集団のシンボルマークとして使われてきたという。神秘主義者は悪からを守ったりオカルトの知識と威力を高めようとして、五芒星の護符を身につけたという。これと良く似たダビデの星は、正三角形を二つ重ねた図形で構成されており、篭目模様（六芒星　Hexagram）であり呪いをかけたりするものではない（然し、六芒星も護符として用いられていたともいわれている）。

これらを受けて、古代シナの陰陽道、ヘルメス、日本神道などにも取り入れられた。何れも生命を司る神秘的幾何図形とされている。

これは「５」という数字の神秘性と、図形の幾何学的構造には何か魅力的な要素があると思われる。

従って、五芒星の元祖は安倍清明ではなく、陰陽道が我が国に伝来された時、同時に五芒星も伝来されたとみるべきであろう。「セーマン」とは安倍清明が陰陽道を国内に広めた際、五芒星も同時に多くの民衆に知られるようになったため、名付けられた呼び名かもしれない。

４．護符としての五芒星

五芒星が魔力を持つ護符とされる理由は、陰陽五行説の相剋・相生が其のまま図形化されており、常に相手に勝ち続けるという緊張関係、一方では相手を生かし続けるという円満具足の円で表されるからであろう。相剋・相生の関係が破邪除災に結びついていったのであろう。

また、三重県二見町（現伊勢市）町史によると、図形的にも左下の「金」

の点を起点として「木」「土」「水」「火」「金」と「往て来て往きて又来た」という言葉の含みをもって、一筆で書くことが出来、途中隙間がなく悪霊の入る余地がなく、必ず出発点に帰るということで魔除けとして重宝されている（この書き順には色々な説がある）という。また、弾除け（多魔除け）の意味で、明治以降の旧陸軍の軍帽に刺繍されたり、階級章マークとして採用されていたという。

５．幾何学的意味―黄金比

古代ギリシャ時代から調和した美しさを感じさせるものとして、黄金比という概念が認識されてきた。黄金比で構成されている図形・絵画は美しいとされミロのヴィナスは臍から上と下の寸法割合が黄金比であるため美しいとされていることは有名である。

五本の線で画かれている五芒星は最も単純で全てが黄金比で構成されている代表格である。濱田信次氏の『ST-020301 黄金比・黄金分割と美意識』によると、黄金比・黄金分割とは「一つの線分を中外比に分かつこと、即ち、“分割された小部分の長さの､分割されたもう一方の大部分の長さに対する比を、分割された大部分の長さの、全体の長さに対する比に等しくなる比、又はそのように分割することであり、これを数値化すると次の通りとなる。

$$\left(\sqrt{5}+1\right)/2 \qquad (1.618...)$$

五芒星の五本の線がお互いに黄金分割されている幾何学的な証明や、黄金比の計算根拠については本編では省略するが、実際にスケールで計ってみれば容易に確認できる。

参考資料　rakuten-hyakkiyakou/006001 ホームページ
Skeptic’s dictionary pentagram　ホームページ
二見町市史　二見町
黄金比・黄金分割と美意識 ST-020301　濱田信次

「ドーマン」について

「ドーマン」とは「九字格子」

この神法の根源である「九字」の初出は、東（西？）晋の葛洪（？～西暦 334 年頃）が著した『抱朴子』（道教発達の理論的基礎を記した書物で道教説教の根本思想は本書中に述べられているという）内篇巻１７「登渉篇」にあるという。

『抱朴子』「登渉篇」では、その「九字」とは神仙修験者の入山時に唱

えるべき「六甲秘祝」（九字神法、御霊入れ秘事行法の一つ）として

臨　兵　闘　者　皆　陣　列　前　行

「兵（いくさ）に臨みて、闘う者、皆陣列に前（すす）みて行く」

という記述があるが、次に出てくる「手印」や「四従五横（九字格子）」に切るという所作は見られない。おそらく所作は後世の付加物であろう。

「九字」は元来道教で、「臨兵闘者皆陣列前行」と「印」の名前を唱えて魔を避ける法であったが、この「九字」が呪法として仏教（密教）、陰陽道、修験道にそれぞれ秘術として採り入れられ、独自の呪法に種々変化していった。

中でも陰陽道の葦屋道満（天徳 2～治安 2 年　西暦 957～1022 年）があみだしたとされる「九字紋」或いは「九字格子」といわれる格子状の図形が有名で、彼の名を取って「ドーマン」と名付けられている。

参考資料　密教九字切り占い　kakekomian. k ujikiri-1　ホームページ

「九字の印」を結ぶ

元来道教では「臨兵闘者皆陣列前行」と印の名前（九字）を唱えて魔を避ける法であったが、我が国では仏教、陰陽道、修験道がその秘術を独自の呪法として変化させ採り入れ、「印を結ぶ」或いは「九字を切る」という念力を発生し、超能力を呼ぶ原動力となる所作を付け加えた。

この「九字の印」を結ぶという意味をもう少し理解することを試みる。

九字の修法は、道教の九字と密教の「印」を結びつけたものである。元来、道教の九字は

臨　兵　闘　者　皆　陣　列　前　行

「兵（いくさ）に臨みて、闘う者、皆陣列に前（すす）みて行く」

であるが、宗派によって若干異なり、密教の場合は

臨　兵　闘　者　皆　陣　列（裂）　在　前

「兵（いくさ）に臨みて、闘う者、皆陣をはり列を作って前に在り」

となる。

「九字」の実践は、「臨兵闘者皆陣列（裂）在前」と唱えながら、一文字につき一つの「印」を結んで行き、最後に「刀印」を結ぶ。それぞれの「印」にはそれぞれの宗派の本体となる神や仏が存在する。

ではその「印を結ぶ」、「刀印」というのはどういうことなのか、まず「印を結ぶ」から学習して見よう。

「印契」ともいい、仏の悟りの内容を示す手指の形（ムドラー）（下図の右下の形（刀印）を除く 9 種）が元になっている。密教では声で「真言・陀羅尼」（梵語の経典）とそれぞれの「印」に割当てられた「九字」の一文

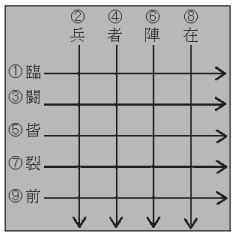
字をを唱え手に上図の９種の「印」を結び瞑想する。
「九字」「印」と各宗派の「守護神等」の関係は凡そ次の通りである。

九字	印　名	守　護　神　等			
		仏　　教	神道・修験道	陰陽・九星	陰陽・五行
臨	不動根本	毘沙門天	天照大神	一白水星	青龍
兵	大金剛輪	十一面観音	八幡神	二黒土星	白虎
闘	外獅子	如意輪観音	春日大明神	三碧木星	朱雀
者	内獅子	不動明王	加茂大明神	四緑木星	玄武
皆	外縛	愛染明王	稲荷大明神	五黄土星	空陳
陣	内縛	聖観音	住吉大明神	六白金星	南斗
列	智拳	阿弥陀如来	丹生大明神	七赤金星	北斗
在	日輪	弥勒菩薩	日天子	八白土星	三台
前	宝瓶	文殊菩薩	摩利支天	九紫火星	玉女

参考資料　九字　karen.saiin　ホームページ
密教九字切り占い　kakekomian　ホームページ
九字の秘印　ichi12　ホームページ

「刀印」で「九字」を切る

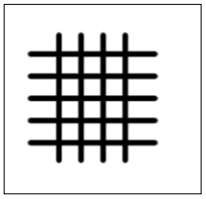
「九字の印」を結んだあと、左手を腰に当て、右手で作った「刀印」で空中に「九字」を切る。９回のうち奇数回目は左から右に、偶数回目は上から下へ、右図の順序で「九字」を唱えながら勢いよく手を動かす。



九字を結ぶ時間のないときは、「刀印」の形で「九字」を切る所作のみを行う「早九字」という呪術もある。

参考資料　九字　karen.saiin　ホームページ
　　九字の秘印　ichi12　ホームページ

「ドーマン」の図形



「刀印」で空中に「九字」を切る所作は、九つの線を左右上下に画く事である。葦屋道満は更にこの所作を省略して、この所作を図形化して護符としたといわれる。これが現在伝えられている「ドーマン」又は「九字格子」と呼ばれるものである。「九字の印」を結んだり「九字」を切るなど難しい所作をせずに、「九字護身」を行える様にして、陰陽道と民衆との接近をはかったのではないかと思う。道満の生存時期からみて平安時代後期、西暦１１世紀前半の頃ではないかと思われる。「セーマン」についてもほぼ同時期であろう。

注連縄について

注連縄の由来

我が国における注連縄の起源は『古事記』の「天の石屋戸」事件に遡るという。天照大神が須佐之男命の乱暴を畏れ「天の石屋戸」に隠れた時、この「天の石屋戸」の前で、

“天宇受売命……天の石屋の戸にうけ（おけ）を伏せて、蹈みとどろこし、神懸り為（し）て、胸乳を掛き出だし、裳緒（ものひも）を陰（ほと）に忍し垂れき。爾（しか）くして高天原動（とよ）みて、八百萬の神共に咲（わら）ひき。……天照大神……「……何由（なにのゆえ）にか、天宇受売は楽（あそび）を為（し）、亦、八百萬の神は諸（もろもろ）咲ふ」とらしき。爾くして天宇受売が白して言はく「汝の命に益（ま）して貴き神の座（いま）すが故に、勧喜（よろこ）び咲ひ楽ぶ」と、……其の隠り立てる天手力男神、其の御手を取り引き出だすに、即ち布力玉命、**尻久米**（此二字以音）**縄**を以て其の御後方（みしりへ）に控（ひ）き度（わた）して、白して言ひしく、「此より以内（うち）にな還り入ること得じ」といひき。…”とある。

この「尻くめ縄」が今の「注連縄」の原義とされている。小学館の『古事記』の中で、「尻くめ縄」の注釈では注連縄のことである。小学館の『日

本書紀』神代上では**「端出之縄」**の訓注に“左縄端出という、此には斯梨俱梅儺波（シリクメナハ）と云う”とある。藁の端を出したままにした神事用左綯いの縄をいう。クメは「出ス」の古語とも、或いは「組ム」「籠ム」の意で下二段他動詞「クム」の連用形と注釈されている。「シリクメナハ」という言葉は、文字が我が国に伝来する前から存在していて、伝来した文字を当てたのが、「尻久米縄」・「端出之縄」や「注連縄」である。古代縄文人は文字は借りても我が国古来の「和訓（よみ)」は変えなかった。このような例は他にも色々ある。

「しめなわ」のことを何故「注連縄」と書くのかといことについて、吉野裕子女史の説は、古代シナでは人が死んで魂が体外に出たとき、その魂がその体に戻って来ないように、水を注いで清めて縄を連ねることを「注連」といいその縄のことを「注連縄」と言っていた。『古事記』の「尻くめ縄」という言葉に古代シナで使われていた「注連縄」という字を当てたということである。この場合も、『古事記』と同じように死者の魂が元の肉体に戻らない様に「注連縄」が両者を隔てる役割をしている。

蛇のことを「くちなわ」ともいう。つまり「朽ち縄」のことから蛇と縄の繋がりが想像できよう。

要するに「注連縄」はある場所を此方と外界に隔てるものである。

参考資料　シメナワのラセン　plaza rakuten.opektal. 楽天ブログ
天の石屋　『古事記』　小学館
素戔嗚尊の乱行と追放　『日本書紀』　小学館

縄文時代の蛇信仰

吉野裕子女史は「注連縄」の形は「蛇の交尾」（交尾の際、注連縄のように絡み合う）の形を擬し、縄文人が最も神聖視したもので、我が国の蛇信仰は縄文時代から引き継がれているという。『古事記』がその影響を受けているのは理解できる。

さらに、「尻くめ」は「尻を組む」ということで、雌雄一対の蛇の交尾を意味するという。

蛇の交尾は和風では「左巻き」（巻き終り側から見て）で注連縄と同じである。蛇の交尾は頭部から次第に体を巻きつけていき、尻尾まで達する時間は４時間かかるという。また、交尾が終わって離れ始めるのに２６時間という。然も完全に離れる寸前まで突出した雄の性器が雌の体内に入っているという。

縄文人にとってこのような蛇の交尾こそ、旺盛な生命力、繁殖、豊饒のシンボルに相応しいと考えていたともいう。

また、蛇は脱皮をする動物なので、蘇生・永遠の命を感じていた。蝮などの強烈な生命力と、強力な毒で敵を一撃のもとに倒す強さに対して、畏れと信仰対象となった。

交合する雌雄の蛇は、縄文人の逞しい想像力によって、神々の降臨する「依り代」に或いは神事を斎行する場所を区別する「境界」の役割を担う「注連縄」に昇華していったといわれている。

話は飛躍するが、メソポタミアの神話では蛇や龍は悪魔の化身として出現する。然し、砂漠の多いメソポタニアやシルクロードでは水は貴重なものであり、水の中を自由に泳ぎ、蛇行する川と似ている蛇や竜は水神として祀られた。水や井戸をことの外に尊ぶ勢力がいたからであり、旺盛な生命力と相俟って強烈な蛇信仰に高められていったといわれている。

参考資料　シメナワのラセン　plaza rakuten.opektal. 楽天ブログ
日本神話ルーツの謎　鹿島昇　神国民社

神道と注連縄

元来注連縄は神明（神）が座します神聖な地域を示す縄張りで、村落や家々に張り巡らすものである。新年には門口・神棚・竈・車などに張られている。全て左縒りの縄で出来ており、藁の尻を切らず、三筋、五筋、七筋ずつ端を出して（端出之縄）垂らすので、七五三縄と書いて「しめなわ」と呼んでいる。神聖な場所であることを示す意味では「標縄」、「締縄」とも言う。シメナハは占有を表す縄のことで、「しめなわ」を張ることは重要な神事であった。

垂れ下げた藁の間に紙垂（しで）を垂たらす。紙垂は四手とも書かれるように四垂れの紙が普通であるが、伊勢地区では神宮の紙垂に倣って陰陽道のように奇数を尊び三垂としたり、また、中執（なかとり）といって中央の一切れを上方に執り上げ両端の一切れづづを下げる方法などがあり、紙垂の紙の重ね方も二枚が普通であるが、八の倍数又は分数の数に重ねるのが良いとされている。

伊勢神宮では祓所・遥拝所・厩だけに注連縄が用いられ、御遷宮では道筋の別れ道だけに張られる。その例により神明造の場合は注連縄を使わないところが少なくない。出雲大社も少なく、上鴨神社では鳥居のみ、下鴨神社では全然使われていない。

注連縄の張り方は、四方に張る場合は神前左後から始め、一面だけの場合は、普通は縄の綯い始めを神前の左即ち神前に向かって右にする。山陰や東京など一部の地方では逆となる。

注連縄を張り巡らす目的は、

１．注連縄を張り巡らすことによりその内側を神聖な所にする（縄張り）
２．年頭に人間に災いをもたらす禍神が家の中に入らぬよう呪具（悪鬼を縛るという言伝えがある）として、作った縄を門前にかざり平穏な一年を迎えようとした（茅の輪）
３．米の持つ呪力を利用して稲藁が使用され、豊作・五穀豊饒を神に祈った。古来より神々には第一に「米」を奉納した

等々であり、豊葦原瑞穂国の「米」の文化を引き継いだ風習であろう。

参考資料　注連縄（しめなわ）　みちひらき　宇治土公貞幹　猿田彦神社

伊勢志摩地方の注連飾

伊勢志摩地方の注連飾（門飾り）の構成

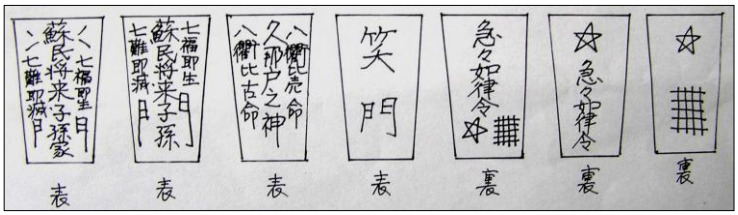
いよいよ本稿の最終章を迎え、何時どのようにして伊勢志摩地方の注連飾が現在の形になったのかを考える。前項までに縷々各呪文について学習を試みたが、この目的に合致するような内容には充分に触れられたとは思えない。その為それぞれの呪文の来歴から推測せざるをえない。

伊勢志摩地方の多くの民家の玄関先に「蘇民将来子孫之家門」と書かれた護符をつけた注連飾があるが、これほど広い範囲に「蘇民将来」の信仰が、今尚伝承されている地域は他にはないという。伊勢神宮の信仰と共に「蘇民将来」信仰が篤い土地でもある。

では、この注連飾がどのような構成で出来ているのかを調べて見る。

１．護符

注連縄のなかで最も中心的な存在である。書かれている呪文も下図の通り何種類かある。



最も代表的なものは、表は一番左、裏は右から三番目であろう。

本稿でこれまで出てこなかった神々、呪文について学習しておく。

八衢比古命（やちまたひこのみこと）とは高天原から葦原の中つ国に降る道の途中にあった天上で数多くの道の分かれる所、即ち天の八衢

（や　ちまた　ちは道）の守護神。境界守護の神（道祖神）であり、夫婦和合の神でもあるといわれており、猿田彦神も当てられている。

久那戸之神（くなどのかみ）とは来名戸の祖神で岐神（ふなどのかみ）という。集落の入口にあって外部からの邪霊が侵入することを防ぐ神。八・比古命とともに「塞の神」といわれ、役割は八衢比古命と同じで同神か。道祖神。

笑門とは「蘇民将来」を省略して「将門」と書くと「平将門」が連想されることから音の通じる「笑」に改めたという。

何れも除災の呪文といえる。

２．縁起物

注連縄を飾る植物などにもそれぞれの願いがこもっている。

橙（だいだい）　代々家が繁栄する
馬酔木（えせび）　虫除け
橘葉（ゆずりは）　子孫を絶やさない
柊（ひいらぎ）　厄除け
四手（しで）　神域を表す
裏白（うらじろ）　誠心を表す

３．注連縄

外から禍神が入りこまない様に縄張りをする。太い縄は威力が大きいとされる。

全ての部品に厄除けの願いがこもり、強力な禍神を遠ざける呪具としての役割を果たしている。

参考資料　「蘇民将来子孫門」のいわれ　柴田勉氏ご提供の資料

伊勢志摩地方の「蘇民信仰」

松下社

伊勢志摩地方の「蘇民将来信仰」は矢張り二見町に鎮座する「松下社」の創建が濫觴といえる。

『二見町史』によると、この社の創建は不詳であるが、もと「牛頭天王社・御船社・松下社・清明の森」などと称されていた。この社は非常に古い神社であるが、古書記録は何一つ遺されていないので、往古のことはよく分からない。恐らく初めは内宮摂社神前神社が祀られており、神宮神事との関りが深かったものと考えられる。中世、神宮の諸式が衰退すると、神宮に代わって松下地区民衆の手により産土神としての性格が強められて行く。こうした時に庶民への活発な唱導活動を広げていた修験者達によって、除疫神の神格をもつ「牛頭天王」の信仰が迎えられたのではないだろ

うか。当時の修験者達は神道・仏教・陰陽道三者習合の特異な性格が見られた。その後、「蘇民説話」などから、「蘇民社」も勧請されたものであろうと述べられている。

『二見町史』に中世、神宮の諸式が衰退したと述べられている。これは鎌倉時代に外宮の神官であった度会氏を中心に、鎌倉時代末期（西暦１４世紀中期）に伊勢神道が体系化された。「神道五部書」という経典を文章化する過程で、中国の五行思想、老子、儒教などの典籍からの引用が様々な形でなされた。本来、神道は祝詞以外に言語化された教典類を持たなかった。伊勢神道が仏教との差異化を図ろうとした時、仏典に相当する教典を持つことは不可欠なことと意識されたためである。伊勢志摩地方における「蘇民信仰」が、修験道者によって、民衆に浸透し始めたのは、神宮が外来宗教の思想を採りいれた南北朝期から室町初期（西暦１４世紀中、後期）ではないかと思われる。鎌倉時代末期には修験道も密教から独立してその活躍は目覚しい。

又『二見町史』は、昔は松下社の運営は、主だった２５軒で作った結衆によって進められ、「蘇民将来子孫家門」の桃符の発行が主要なものであった。旧１２月１６日に結衆吏員、寺僧等が集まり桃符を書いた。「蘇民将来」の桃符は江戸時代慶安年間（西暦 1648～1651 年）に最も多くの信者を呼んだと述べている。尚、一説には版木の状態から中世室町時代の文安年間（西暦 1444～1448 年）から桃符の発行が行われていたと推測されるとしている。

更に『二見町史』は松下会所に、密教の造像・念誦・供養等全ての方法・規則を記した典籍の一種である『敬白牛頭天王儀軌之事』という「祭文」を書写したものが遺されていると述べている。その「祭文」の内容はほぼ我々が知る「蘇民説話」と同様であり、その奥書に原本が破損しているので江戸時代初期の元和元（1620）年に「性慶法印本住根来寺小池坊写畢、古本作者空海（平安時代西暦 774～836 年）トモ見タリ」とある。私の調べた所では、根来寺は鎌倉時代中期安貞２（1228）年に真言宗の分派新義真言宗大本山となったが、桃山時代天正１３（1585）年秀吉の紀州攻めで焼かれて平定された。焼失を免れ破損した平安時代の空海直筆の『儀軌』を書写したものが、何時頃どのようにして二見の松下会所に伝わったのかよく分からないが、江戸時代初期の西暦 1620 年以前に遡る資料は無い。

『三重県神社誌』（三重県神社庁）によると、「松下社」に「牛頭天王」を勧請したのは安倍清明（西暦 921～1005 年）と言い伝えられ、清明森とも蘇民森とも称したが、古記録にはこれを指し示す例が見られない。『（荒木田）氏経神事日次記』の室町時代中期文安６（1449）６月１５日贄海神態の条に「甚雨の間に、饗に於いては、松下社の拝殿に於いてこれを調理す」とあり、記録上は松下社の号が最も古く伝えられる所に因って、明治３年１０月に改めて「松下社」と称する事になったという。

護符と注連飾について『三重県神社誌』には、当社鎮座の森を蘇民森と称すのは『豊後風土記逸文』にある「蘇民将来」の記事に酷似の説話が当社にあり、「蘇民将来子孫家門（更に蘇の四隅に「‘、」記号を付ける心点を付す)」と書いた桃符を１２月１６日の祭祀において頒布する。これは伊勢志摩地方全域にわたり、楣（戸口の上の飾り？）に注連縄を共に懸ける風習が残ることによると述べられているが、この風習が始められた時期は述べられて居らず、最も早い時期としては室町時代中期西暦１５世紀中葉であろうか。

祭文「牛頭天王縁起」「八王子祭文」など

神宮文庫に遺されているという、『牛頭天王縁起』とこれと一対となっている『八王子祭文』は山田地方で実際に読誦されていたという、村井古厳書写の「祭文」である。年代は江戸時代中期（西暦１８世紀中頃）である。神宮文庫に遺されているもう一通の『牛頭天王之祭文』もその奥書から宝暦８（1758）年に外宮の権禰宜正晃が書写したものである。

この三つの『祭文』から、江戸時代中期（西暦１８世紀中期）の時点では、真言系の僧侶・修験道者等が病者のいる家に出向き、「牛頭天王」など眷属を勧請し『祭文』を読誦して、厄除けをしていたと考えられる。

その当時、戸口に現在のような護符と注連飾を付けるという習慣があったか否かは不明であるが、この時期が境目になる可能性は高い。

伊勢参宮名所図会

寛政９（1797）年蔀関目作により完成した『伊勢参宮名所図会』に「蘇民将来社」と「素盞烏尊蘇民に宿を乞」という絵図がある。そのなかに「折ふしアハサの国より暴疫鬼来る事を察し給ひ蘇民が家に茅の輪を造りて帯させ給へバ翌日に至りて一村の内蘇民が家のみ恙なく死を免がれたりかくて尊（みこと）別れに臨でいはく此後疫気流行の時もあらば蘇民将来子孫と書て門楣（もんび…門の上の梁）に點（たら）し置くものならバ其禍ハ退くべしとなん教へ給ひとぞ」と記述されており、この時既に茅の輪を体につけたり、門の梁に護符（注連縄については述べられていない）を垂下げて災禍を避ける風習のあった事を示している。然し、確かなことはいえないが、『伊勢参宮名所図会』に画かれている家々の戸口に護符が懸けられている絵は見出せない。

伊勢市内の牛頭天王社

先に掲げた神宮文庫蔵の『八王子祭文』に記されている「東海道勢州度会郡山田原而其郷其村而居住令給、諸氏人・上中下兆民、二天・八王子仕令奉給」山田原の地に有名な「松下社」以外に牛頭天王を祀ったどのような寺社があったかを検証してみる。

「山田原」という地名は現在では存在しないが、宮川分流の流れる「山田原」とは、外宮宮域から現在の山田の市街地とその附近一帯を指す。外

宮神域内にある土宮は外宮が鎮座するまで「山田原」の鎮守として祀られていたという。この一帯は地盤が低いため住民はしばしば洪水に悩まされたと『山田惣絵図解説』に記されている。

私が調べたところでは、天保４（1833）年刊の『勢陽五鈴遺響』に「牛頭天王社（祠）」として「松下社」の他に「牛頭天王社」と「牛頭天王祠」の二社の記録がある。

牛頭天王社（辻久留一丁目）

現在上社（かみのやしろ）として旧小川町に現存する。『山田惣絵図解説』によると、昔は外宮の摂社であったが、荒廃していたところ附近の住民が産土神として崇められたものと伝えられている。それ以後、一般には「牛頭社（ごずさん）」と呼ばれてきたが、明治初年に「上社」と改称された。

寛保２（1742）年刊の『山田惣絵図』には記載されているが、創建の時期は手元の資料不足のため分からない。

牛頭天王祠（河崎二丁目）

『宇治山田市史』によると、元は「須佐神社」と称していたが、永祿１０（1567）年に再興の上「広峰社」と改称された。河崎町八つ町にあった。祭神が素盞烏尊（牛頭天王との習合）であることを窺わせる。

『勢陽五鈴遺響』によれば、「『荒木田武季旧記』云河崎西の世古天王神社（上記の広峰社のことか　私の注記）ハ、往古ヨリ石畳ニ石体ニテ座シケルニ（社殿が無かったか　私の注記）享保４己亥（1719）年ヨリ四十四年前（延寶３年：西暦 1675 年）疫癘（えきれい　ハンセン病か　私の注記）流行ノ節、寺本善十郎浄覚夢想ニヨリテ初メテ宮殿（祠　私の注記）ヲ建ル由依之遷宮モ町内ノ搆ヒナシニ数年ヲ暦テ今ニ至ルトソ云云　（『荒木田武季旧記』には記載されていないが　私の補記）今（『勢陽五鈴遺響』刊行の西暦 1833 年）詳ニスルニ寛政２（1790）年１１月公裁ヲ経テ社域ヲ大智庵ノ地ニ広ク築キ建ツ　云云　荒木田武季ハ内宮権禰宜ニシテ下津氏ノ徒ナリ享保４年ヨリ前ヲ訂（ただす）ルニ延寶４（1676）年（享保４年から４４年前は延寶３（1775）年か　私の注記）ノ時トスヘシ是神祠ヲ設ル処ニシテ其先ハ知ルヘカラス毎歳六月十四日祇園会ニ倣ヒテ私ニ坊間祭式アリ」と記述さている。これは津島神社の天王祭と同じ日取りである。

『宇治山田市史』によると現在の河邊七種神社へ合祀されたのは明治４３（1908）年と新しい。

参考資料　二見町史　二見町教育委員会
伊勢神宮　東アジアのアマテラス　千田稔　中央公論新社
伊勢神道　百科事典マイペディア（電子辞書版）　日立システムアンドサービス
松下社　三重県神社史　三重県神社庁
度会郡　勢陽五鈴遺響５　安岡親毅　倉田正邦校訂　三重県郷土資料出版会

山田惣絵図　伊勢文化会議所

伊勢志摩地方の七福神信仰

志摩地区の寺院の創建（あらまし）

志摩地区における最古の寺院は国分寺（阿児町国府）並びに青峰山正福寺で、奈良時代前期の天平年間（西暦 729～748 年）に創建されたと伝えられている。然し一般郷村に仏教が浸透してきたのは、鎌倉中後期（西暦１４世紀初期）と思われ、集落の成熟とともに寺院の創建が始まったが、人口が少なく寺院護持が難しく廃寺・中興を繰り返し仏像のみ里に残されることが多かった。室町時代後期（西暦１６世紀頃）にこれらの仏像が民衆の信仰により堂を建立し在郷の護持仏となった。又鎌倉時代より真言、天台の密教寺院や山岳仏教などの修験宗の寺院が志摩地区で勢力を張っていた。

安土・桃山・江戸の武将である鳥羽藩の九鬼二代目藩主守隆（天正元年～寛永９年　西暦 1573～1632 年）は初代城主、嘉隆の菩提のため文禄年間（西暦 1592～96 年）、鳥羽に常安寺を建立し、その僧侶をして志摩国内の弱小寺院又は廃寺を中興開山し、曹洞宗に改宗させ常安寺末寺とした。志摩地区に曹洞宗寺院が圧倒的に多いのは、江戸幕府のキリシタン禁圧（西暦１７世紀前期）のために始まった寺檀制度とこの鳥羽藩の宗教政策が合致したためである。

志摩地区で天台宗の根本経典の一つとなった『仁王護国般若波羅密経（仁王経）』（偽経という説がある）と同系の『大般若経』の読経・転読（経典の題名と初・中・終の数行だけを読誦して全体を読むに代えること又その読み方）が攘災招福（七難即滅・七福即生）のため、真言・天台等の密教系宗派や禅宗（曹洞宗・臨済宗もその一宗派）において盛んに行われ民衆に浸透し始めたのも、江戸時代初期（西暦１７世紀前期）と思われる。

これより先、室町後期の天文年中（西暦 1532～54 年）に波切城主三代九鬼隆次は臨済宗の寺院として、旧波切村（現大王町）の泉住庵（仙遊寺）創建した。その後郷村の発達と共に領内に臨済宗の寺院が創建された。その中に泉住庵（仙遊寺）とともに志摩七福寺となっている旧波切村の隣仲庵（大慈寺）、旧立神村（現阿児町）の本福寺がある。

参考資料　大王町史　大王町教育委員会
　　阿児町史　阿児町教育委員会

志摩七福神

伊勢志摩地方における七福神の民衆の信仰は、古記録の無いことからみて比較的薄かったと思われる。

昭和６１（1986）年に次の４カ寺で志摩七福神が開創された。

寺院名	仏像・境内堂・祠	七福神	所在地
青峰山　正福寺 真言宗 創建　天平年間	十一面観音菩薩 聖天堂・大師堂・弁天堂他	恵比寿神	鳥羽市松尾町
神護山　仙遊寺 臨済宗妙心寺派 創建　天文 11 年	十一面観音菩薩 薬師如来・達磨大師鎮守堂（稲荷）他	大黒天・毘沙門天	志摩市大王町波切
法雨山　大慈寺 臨済宗妙心寺派 創建　天正 18 年	十一面観音菩薩 千手観世音・弁財天 布袋・他　鎮守堂（弁天堂）	弁財天・布袋尊	志摩市大王町波切
正宝山　本福寺 臨済宗妙心寺派 創建　寛永 10 年以前	阿弥陀如来 太子堂（聖徳太子）	寿老人・福緑寿	志摩市阿児町立神

天平年間　西暦 729～749 年　奈良前期）　　天文 11 年（西暦 1542 年　室町後期）

天正 18 年（西暦 1590 年　桃山中期）　　寛永 10 年（西暦 1633 年　江戸初期）

志摩七福神の開創に尽力された大慈寺の住職秀森一陽和尚の御話によると、伊勢志摩地方では古来、商家や農家で恵比寿を祭った恵比寿講を行ったり、漁業・海上の守り神（青峰山正福寺）としての信仰があった。また、大慈寺では本堂に本尊とは別に千手観世音菩薩、弁財天像、布袋像が安置されており、境内の鎮守堂にも守護神として弁（財）天さんを安置するなど、古くから弁財天・布袋尊をお祀りしてきた。一陽和尚は先代の典嶺和尚と共に同じ宗派の仙遊寺、本福寺に正福寺を加えた４カ寺で「志摩七福神霊場」を昭和６１（1986）年に開創され現在にいたっている。

これらのことから、注連飾に付けられる護符の表面の「七難即滅、七福即生」の呪文は民衆の七福神信仰から出たものではなく、室町時代後期（西暦１６世紀）の臨済宗や曹洞宗が盛んであった志摩地区で読経・転読された『仁王護国般若波羅密経』の中にあると云われる「七難即滅、七福即生」という経典の一部が信仰の対象となったことによるものであろうか。これを護符に書きこむことによって、新しい年の初めにあたって、攘災招福を願ったものであろうか。

参考資料　鳥羽市史　鳥羽市教育委員会

大王町史　大王町教育委員会
阿児町史　阿児町教育委員会

「急急如律令」と「セーマン・ドーマン」

志摩地区の「急急如律令」

阿児町史にしめ縄「しめの札」として次のような記述がある。
　古くは折箱に使われるくらいの厚さの薄板を重ねて縛り、

久久めりん合　☆ 卌

と書いてつるす。志島では今もそれが使われている（私は未確認）。これは「急急如律令」の転訛であろうか。
　何故このような転訛が行われたのかを私流に考えて見る。

急急→久久	文字の理解できない漁民達のために同音で画数の少ない文字を当て書きやすくし、同時に急がずに長く久しくという願望を表しているか。
如　→め	「如」の崩し字が「め」という「かな文字」に似ている。
律　→りん	「りつ」の「つ」が滑らかに次の音につながるように撥音（ん）に訛ったのではないか。
令　→合	双方の崩し字がよく似ている為、混同したのではないか。

「急急如律令」の文字は識字率の低い海人達には親しみ難く、簡単な文字に転化した事によって、その普及が広まったのではないだろうか。その為、この呪文は注連縄の「しめ札（護符）」のみではなく、海女の磯テヌグイ等に魔除けの呪文として広く普及したと思われる。これは修験道者達の普及活動によるものであろう。
　これは私の仮説ではあるが、現 ☆ 卌 在の伊勢志摩地方で広く普及している注連飾の護符裏面に　急急如律令　　と書かれている文字が志摩地区では「しめ札」に書かれて簡単な注連縄に吊るされていた。このことは「蘇民将来子孫之家門・七難即滅・七福即生」という呪文とは別個に普及し、やがて両者は習合したのではないか。

参考資料　阿児町史　阿児町教育委員会

海女の魔除け

鳥羽市史はかなりのページをさいて、鳥羽市周辺の海女の磯着について記述している。

志摩地区の海女は古来から磯ナカネ（腰巻）と磯テヌグイ（手拭鉢巻）のみ使用していた。イソシャツは昭和２，３年頃よりあったが昭和１０年代までは使用せず上半身は裸であった。

海女達は磯テヌグイに魔除けの印を大工が墨打ちをし、それを黒糸で縫いつけた。７月、４月を外した月に魔除け印を縫うが、用意できなかった人はコトカケといってウニやニシで印を書いた。

鳥羽市史から各地域の魔除けの印と呼び名を拾うと次の様である。

㋝はセーマン印、㋜はドーマン印を示す。

菅島　㋝　キューキューメンド（一）　モージャ（亡者　死んだ後に成仏しないで魂が冥土で迷っているもの）、ヒラガシラ（平頭　目白鮫）、トモカズキ（共潜　海中の妖怪の一つ。志摩の海女が曇った日に、水の底で見かけるという自分と同じような姿をした魔物）などの魔者より身を守る。

神島　㋝　セーメー

　　㋜　九字を切る

答志　㋝　ドーマン　セーマン

　　㋜　セーマン　ドーマン

石鏡㋜㋝　ドーマン、セーマン

国崎㋜㋝　キューキュードーマン、セメギノハ（責木とは原料を締めつけて油などを取るための木製の器械、或いは楔のことをいう。この場合は器械の歯車のことか、楔の尖った部分をいい・の意か）。

両方合わせてシメハン（シメは注連縄の略、ハンは板のことで「しめ札」のことか　私の注）と呼ぶ

　　㋝　セメギノハ

相差　㋝　キューキュー又はセメギノハ

阿児（安乗、甲賀、志島など）

　　㋝　久久メリン又はドーマン、セーマン

地域によって色々な呼び名があるが、陰陽道の影響を受けていることは明らかであろう。国崎地区では「シメハン」と呼ばれているが、これは「しめ札」に書かれていることと同意語であり、阿児地区の「久久めりん」も同様であろう。つまり、伊勢志摩地方では先ず「しめ札」の「久久めりん

合」の呪文があり、それが海女さんの魔除けの印に転用されて行ったものと推定される。

阿児町史によると、海女の磯てぬぐいの他に、海女の使う磯ノミという鮑を起こす道具に「久久メリン☆」を魔除けの印として付け、また舟人（男）もこの磯ミノを腰に差すという。

ところで、我が国の潜水漁法の歴史は古い。西暦３世紀末に書かれたといわれる『魏志倭人伝』に「今、倭水人好沈没捕魚蛤」とある。志摩地区の潜水漁も古く、渡会とは南方系の海人が小船で渡来して出来た集落という説もある。更に一説によると、倭姫命が志摩を巡られた時、国崎（くざき）で海女「おべん」の差し出した鮑を食され、伊勢神宮の神饌に奉納する様に申され、以後熨斗アワビにされ奉納されたという伝承もある（西暦４世紀前半？　私の注）。また『万葉集』に奈良時代中期（西暦８世紀中期）の歌人大伴家持の詠んだ志摩の海人の歌「御食つ国（みけつのくに）志摩の海人（あま）ならし、真熊野（まくまの）の小舟（をふね）に乗りて漕ぐ見み」がある。

古く飛鳥・奈良時代に朝廷に送っていたアワビなどの海産物の捕獲は男のアマである海人によって行われ、伊勢神宮に奉納されるアワビ漁は海女によって行われていたのだろうか。

古い漢語でアマは海人、海士、白水郎（泉郎）と書かれ、「清らかな水の男」という意味合いであったという。然し「泉」という文字は「狭い穴をうがつようにして涌き出るいずみ」という意味のあることから、「死者の魂が行くとされている地下の世界」つまり「あの世」「泉下」「黄泉」を暗示しているともいう。我が国のみならず古代シナにおいても、相当な危険を伴う漁法と認識されていたことが窺える。その為、熱心な海女の「魔除けの印」への信仰は、海中における死への恐怖から逃れるために生まれたものであった。

西城利夫氏は「女性を中心とした海女が定着してきたのは、江戸時代といわれている。それまでは舟の使用も限られていて、男女とも磯と呼ばれる海岸部分での漁が中心であった。然し漁船の普及とともに、魚などを採る漁は男性がおこない、女性は海に潜る漁に分かれた」という。朝廷や伊勢神宮に奉納する魚介類の捕獲漁という比較的小規模な潜水漁から大量消費を賄う大規模な潜水魚への転換期が江戸時代から始まったことにより分業化されたということであろうか。

これらのことから、魔除けの「しめ札」の呪文が海女の「魔除けの印」にも用いられるようになったのは江戸時代初期（西暦１７世紀初期）以降といえようか。

参考資料　鳥羽市史　鳥羽市教育委員会
阿児町史　阿児町教育委員会

日本国語大辞典　小学館
ふるさと再発見　御食国志摩と海女　西城利夫　中日新聞
人麻呂の暗号　藤村由加　新潮社

伊勢志摩地方の注連飾は何時から始まったか（仮設）

松下社の「蘇民将来」の桃札からの考察

松下社の創建は不詳であるが、記録上の初見は『（荒木田）氏経神事日次記』の室町時代中期文安６（1449）年６月１５日贄海神態の条である。

伊勢志摩地方における「蘇民信仰」が、修験道者によって、民衆に浸透し始めたのは、南北朝期から室町初期（西暦１４世紀中、後期）ではないかと思われる。この影響を受け松下社が牛頭天王と習合し、「蘇民将来」の桃符を発行したのは、中世室町時代の文安年間（西暦 1444～1448 年）頃からであり、江戸時代慶安年間（西暦 1648～1651 年）に最も多く発行されたという。

従って、「蘇民将来子孫家門」と書いた桃符を、戸口の梁へ懸ける風習が始められた時期は最も早い時期として室町時代中期(西暦１５世紀中葉)であろうか。

前に学んだとおり、我が国最古の蘇民将来護符は長岡京跡から出土した西暦８世紀末期のものであるが、出土品の多くは中世の西暦１３～１４世紀のものである。ということから、松下社の桃札の発行が室町時代中期頃（西暦１５世紀中葉）から始まったという推定には大きな誤りはないであろうし、この時点では未だ注連縄につけるという風習は未だ無かったのではないかと私は推定する。

寛政９（1797）年に完成した『伊勢参宮名所図会』にも、「蘇民将来子孫と書て門楣に點し置く…」とあり、護符を門の梁に垂らし下げる風習のあったことを示しているが、この図会の中にも門の梁に注連縄をつけた絵図はない。

牛頭天王縁起・八王子祭文からの考察

江戸時代初期（西暦１７世紀後半）には現在の伊勢市内に牛頭天王社・祠が２ヵ所あったことは既に学んだ。蘇民信仰（牛頭天王信仰）が山田地区にも広げられていた。辻久留一丁目の上社（牛頭天王社）と河崎二丁目の河辺七種神社（牛頭天王祠）であり、祇園祭の日に郷村に住む人達がこれらの鎮守社に集い神前に『牛頭天王祭文』などを読誦していた。

更に西暦１８世紀には、山田地方では、既に真言系の僧侶や修験道者が病者のいる家に出向き「牛頭天王」など眷属を勧請し『牛頭天王祭文』などを読誦して厄除けをしていたことが『祭文』の中から窺える。病者の家に出向き神を勧請することは、厄神を遠ざけるための縄張り即ち「注連縄」を祭壇のみならず戸口に懸けるという神事が行われたと考えられる。然も『祭文』の中にある「蘇民将来子孫之家門」と書いた桃札（護符）を付けた「注連縄」が懸けられたと考えられないだろうか。「護符」を付けた「注連縄」を戸口に懸けるという風習が、一般的になったのは江戸時代中期の西暦１８世紀末～１９世紀初頭になってからではなかろうか。

更に注目すべきことは、『八王子祭文』の中に「急急如律令」という陰陽道の呪文が見られることである。つまりもともと「蘇民信仰」と一体になって伝承されてきた「急急如律令とセーマン、ドーマン」の「呪文・魔除けの印」が伊勢地区で初めて習合して「護符」の表裏の呪文となったのも同時期であろうと憶測される。西暦１４世紀後半～１５世紀前半頃と思われる大阪市住吉区「山の内」遺跡の井戸跡から出土した呪符木簡の表面に「昔蘇民将来子孫住宅」裏面に「急急如律令」と書かれいるのはその先例である。

志摩地区で海女の「魔除けの印」にも用いられた魔除けの「注連縄」「しめ札（久久めりん合とセーマン、ドーマン」が戸口に懸けられるようになったのは伊勢地区よりやや早い江戸時代初期（西暦１７世紀初期）以降といえようか。

私の憶測では、海女達の「魔除けの印」の目的は伊勢地区の「除疫」ということだけでは無く「海中での魔除け」であった。

七難即滅・七福即生は民衆の壌災招福の願い

注連飾に付けられる護符の表面に書かれた「七難即滅、七福即生」の呪文は民衆の七福神信仰から出たものではなく、江戸時代初期（西暦１７世紀前期）以降、臨済宗や曹洞宗盛んに行われた『大般若経』などの読経・転読された結果、「七難即滅、七福即生」という攘災招福（七難即滅・七福即生）という経典の一部が民衆に浸透し始めたことによるものであろうか。これを護符に書きこむことによって、新しい年の初めにあたって、攘災招福を願ったものであろうか。

伊勢志摩地方の注連縄のまとめ

伊勢志摩地方の注連縄の護符は疫病、魔除け、壌災招福の呪文のすべてを纏めた全国でも珍しいものといえる。然し、これらについての史料や物

証が乏しく、残念ながらすべてが憶測であるが、発祥・変遷を簡単に纏めると次のようになる。

年　代	蘇民将来子孫之家門	急急如律令	七難即滅・七福即生
南北朝～室町初期 14 世紀中・後期	修験道者の唱導 蘇民信仰庶民に浸透		
室町中葉 15 世紀中期	松下社 桃札（蘇民将来子孫之家門）注連縄なし 戸口に懸ける		
江戸初期 17 世紀初期	松下社 桃札の発行数増加	志摩地区 しめ札（久久めりん合）＋注連縄 戸口に懸ける 海女の魔除けとなる	志摩地区 大般若経読経・転読
江戸中期 18 世紀末 ～ 19 世紀初期	伊勢志摩地方 護符（蘇民将来子孫之家門＋七難即滅・七福即生＋急急如律令とセーマン、ドーマン印）＋注連縄 戸口に懸ける （現在の形となる）		

あとがき

伊勢志摩地方にこのような風習が、何時頃から始まったかについては残念ながら確実に知ることが出来なかった。私の憶測による「まとめ」は客観性に乏しいことは充分に承知している。もっと現地に出向き地元の方々に教えを乞うべきであったと思う。後日時期をみてその機会を作りたいと思う。然し、戸毎に注連縄を懸けている地元の方々も護符に書かれている呪文の故事については関心が薄く、只昔からの風習を繰り返しているという感もいなめない。西暦１５世紀頃に始まり、先人が創り出してきたこの地方独特の風習を先人の敬虔な心にかえり、受け継いで行くことが大切ではないかと思う。

充実した『宇治山田市史』『二見町史』『鳥羽市史』『阿児町史』『大王町史』など市史・町史に恵まれたことは幸いであった。

また、志摩市大王町の大慈寺住職一陽和尚のお話は貴重であった。厚くお礼申し上げます。紫陽花の時期に一度法話をゆっくりと拝聴したいと願っている。

おわり

平成２４年１０月に本稿をＰＤＦ化するに当たり、外字で表現した文字を他の表現に改めたり、幸いに micrsoft office IME2007 パットに組み込まれた漢字を用いて修正した。